

『とんとむかし』第四集（水の研究）

山形県東置賜郡高畠町の民話
福島県耶麻郡西会津町の民話

千葉大学日本文化研究会
民話分科会編

本書は、一九七五年（昭和五十年）十一月一日に
手書き謄写版印刷の民話集『とんとむかし』第四集
（水の研究）として発行された民俗調査報告書をリ
ポジトリ公開用に活字化した覆刻版で、一九七三年
十月に初めて発行された民話集から数えて四冊目に
なります。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字
等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、お
よび句読点の位置の変更等をおこなっています。ま
た、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け
加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のま
まで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章等に
ついては、当時の執筆者および話者からの採話を尊
重し、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

まえがき

深野弘美

民話について書かれた書物は多い。柳田國男翁をはじめとし、その研究の歴史は浅いにもかかわらず、今や「民話ブーム」とまで言われるほど盛んである。絵本や紙芝居はもとより、ラジオの定時番組さえある。それらを作る人は、また視聴する人は民話の中に何を求めているのだろうか。郷愁・笑い・哀しみ・温かさ・神秘性など。それは各人各様異なっているだろう。それらすべてを受け入れ、なおあまりあるもの、それが民話の魅力だといえよう。

しかし、本になった民話、ラジオから流れてくる民話には何か足りない。それは直接的な人と人との触れあいである。「ぴんぱらりのぼーん」と手振りよろしく語ってくれる老人の様子は、本では味わえない。

語り手は聞き手の表情をみて、調子を変えて語る。これこそ、年寄りの膝の上で子供らが何十遍となく同じ話を飽

かずに聞き続けた秘密の一つであろう。すべてが一方通行の今日、口伝えというものがいかに人間的で大切なことか、私は採訪合宿によって痛感させられた。

一方、こうした口伝えの民話が次第に滅び去ろうとしているのも事実である。テレビが山奥の村々にも普及し、他に娛樂がないだけに余計にその比重は大きくなる。語り手であったはずの老人達は、テレビの前でうずくまり、聞き手に変身していく。そうした姿に子供らは、以前昔話を語る風習があつたことさえ知らずに過ごし、数々の話が老人の記憶の中に葬られ忘れられていく。

もちろん、テレビだけにその責任があるわけではないが、私達は、この減少を単に「もののあわれ」的に看過しているのだろうか。佐平ばなしに生きている民衆の知恵や笑い、弥三郎ばなしの恐怖、長い長い間人々の心の中で温められ浄化されてきたものを、おもしろ半分の一過性のテレビ漫画とすりかえていいのだろうか。

私達の力では、その流れを変えることはできないかもし

れないが、ささやかな活動を通して、少しでも生きた民話に触れ、考え、その流れに小石を投ずることができれば嬉しい。

この小冊子を作るにあたり、採集した録音テープをそのまま字にする形式をとった。読者がいくらかでも生きた民話を感じていただければ幸いである。最後に御協力いただいた山形県東置賜郡高畠町、並びに福島県耶麻郡西会津町のみなさま方に深く感謝の意を表し、御礼申し上げます。

もくじ

まえがき 二

【第一部】春の章

高畠町の概略と地図 六

(高畠町の民話)

いわしの頭も信心から 七

麦つき地蔵 八

南の山の馬鹿むこ 八

佐平話 九

佐兵ばなし 一〇

食べたしようにん様 一一

はん子 一二

シンドウ呉服屋の話 一三

化け物の話 一四

さどりのわっぱ 一五

力持ちになった住職の話 一五

高安の犬の宮の話 一七

相撲の話 一九

おりや峠の大蛇 一九

三匹の老狐 二二

弥三郎ばんば 二五

船坂しんべいの話 二六

大和屋の伝説 二七

鈴沼の話 二八

子育て地蔵の話 二九

【第二部】夏の章

西会津町の概略と地図 三〇

(西会津町の民話)

ばかむこの話 三一

ますびきと猿 三三

ホトトギスの兄弟 三五

狐に化かされた話	三五
お釈迦様の話	三七
鬼んばの話	三九
継子いじめ	四三
婿選び	四四
すずめと甘酒の話	四五
猫檀家	四五
首塚・胴塚・足塚	四六
子供の遊び歌	四七
鳥追いの歌	四八
【第三部】水の研究	
はじめに	四九
水と女	五〇
水と生活	五二
蛇	五九
主 <small>ぬし</small>	六三

高畠町・西会津町の民話	(話者と題名)	六七
あとがき		六九
民話分科会名簿		七〇
編集後記		七一

【第一部】春の章

山形県東置賜郡高島町の概略と地図

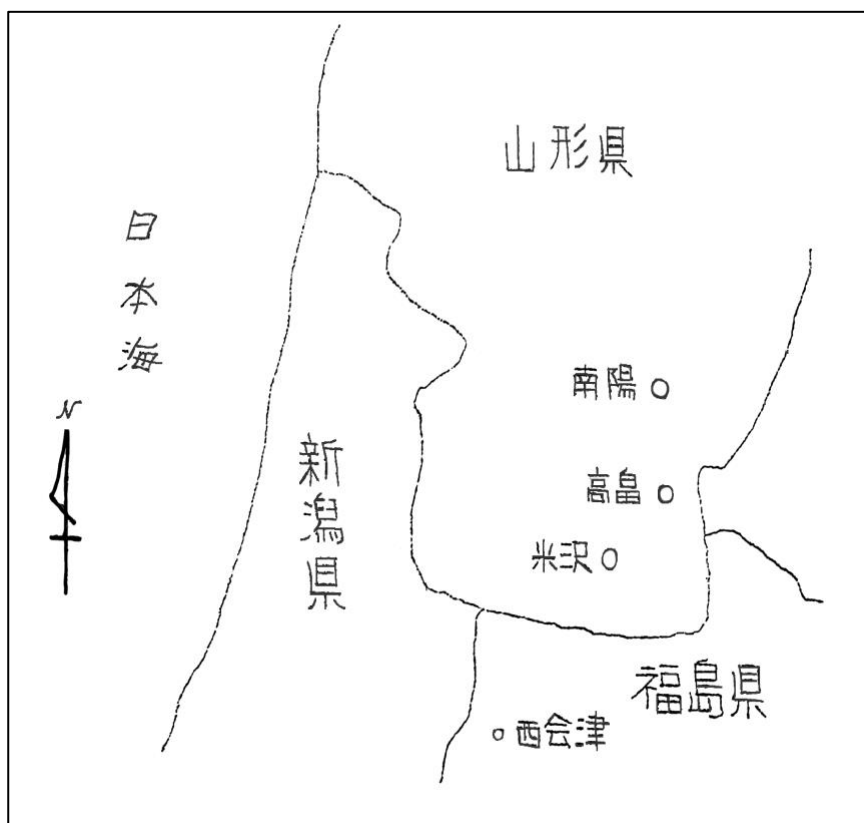
高島町は、山形県南部の東置賜郡に属し、米沢盆地の東部、屋代川の溪谷に発達した盆地東部の中心集落である。

面積は約一八〇平方キロメートル、人口は約三万人の町である。中心の高島は伊達市が宮城県岩出山城に移る前の城下町で、上杉時代になって城代が置かれたが、一六六四年、幕府領となって廃城、陣屋が設けられた。町は城を中心として方形につくられた。

一七六七年に織田氏領となり、一八三〇年に居城を天童に移すまで六〇余年間は、ここに藩庁がおかれた。そして一九五四年、二井宿・屋代・亀岡・和田村の四村と合併して社郷町となり、一九五五年、糠野^{ぬかのめ}目村を編入して再び高島町と改称した。

屋代川の谷口集落には、製乳、製材、くだもの缶詰ジークライトの工場がある。二井宿は、もと二井宿峠下の宿場

町で、今は酪農が中心である。竹森^{たけのもり}には製糸工場があり、製材業もさかんである。亀岡の文殊堂には隣県からの参拝者も多く、高安^{こうやす}は高安犬で知られている。一帯の農村では、米・洋ナシ・ブドウ・リンゴの産が多い。



高畠町の民話

いわしの頭も信心から

(話者の居住地区名)
(船橋)

宮中さ、お万の方つう人がつとめてたと。その人が、砂の中からすごい光るものを拾ったと。それは、姿が観音様だったと。観音像を拾ったんだと。それをそこらかけたってしようがないから、昔、どこか置くところがあつたんだべ。そこさほさんで、自分がありがてえと思うもんだから、そこを通ったときは必ず、こうして礼拝して行ったもんだと。そして、まわりの女中方がたまげて、

「お万さんは何であそこ通ったっていうと手を合わせる、不思議なもんだ」

って。

「いつかいたずらしてくれましょう」
っていたもんだと。

そしてやっばり、そこさ行くとお万さんがこうして拝む

もんだから、その後をぞろぞろと行ってみると、そこにピカーと光るもんがあんだと。

「これだ」

って、そいつをいたずらして取って、別な物をそこさ置いていたずらしたと。

それとは知らねえから、お万さんは、またそこ通ったときは拝んで、みんなこうしてお万さんのあと拝んでたと。

そうすると、どういうもんだか、それから光が出てたんだと。だからお万さんだつてうそじゃねえなって思ってた。だ。

ある日、お万さんがそこを取ってみたら、いわしの頭だったと。いわしの頭も信心からって、そこからきたもんだと。

麦つき地蔵

(亀岡)

この近くの魚屋の近くに家があったの。その家に夫婦がおったが、亭主は非常に磊落らいらくな者で、夜遊びなんかしていたのよ。

そうするとその女房は、麦をついて米と混ぜて食べていたのよ。毎晩、毎晩、その女はやっているうちに、つらからうと思つてどっからか男の人が手伝いに来た。そうすつと、亭主がその話聞いて、夜な夜な帰つて来たと。やっばりその男がほうかむりして、その女を助けてたつつうだ。

そうすつと、助けてたばかりでなく、やっばり男女の楽しみでもあると思つたのかな、亭主がその男を切つたつうだ。そしてずうつと、血をたらしたらし行つたと。そのあとを追つてつたつてわけだな。

そうすると、今、麦つき地蔵つて、文殊様の中腹に立つてござるが、その地蔵になつてたわけだ。それがほんとうの人だか、たぬきだかわかんねえけんどもな。

南の山の馬鹿むこ

(泉岡)

呼(食事)に招かれてばつてつて、数の子豆(こちそうに)ごつそうになつたと。そうしたらその数の子豆うまくて、一皿食つたが、足んねえわけだ。夜な、どこさ、その数の子しまつておくんなあとつて、気をつけてたんだと。そうしたらば、その戸棚の中さ、しまつたんだと。

夜、そーつと起きてきてたがつてよ。で、ガツガツガツガツとその数の子豆食つたんだと。そうして、今度あ、瓶の中まで食つたんだと。そして、瓶がかぶさつてしまつたんだと。そうしたらば、瓶取れなくなつたから、竹藪たけやぶさ入つて、かがんでたと。そうしたらば、便所さ起きてきてな、そして、今みたいに紙なんかから、石でぬぐ(拭いてきれいにする)つてんだと。そしてその石投げやつたと。そしてたらその石、竹藪の中さ入つて、いいあんばいに、その瓶さカーンと当たつたと。そしてその瓶とれちやつたと。

露藤つゆふじというところに、昔、左平という人がいたった。馬鹿なふりして、非常に賢い人だったんだなと。その人の話で一番残っているものは・・・

ここは天領だったんだ。そしてここにお代官所があつてな、御領と私領があつて、この文殊様のところを通るときは下馬しなければならなかったんだ。ここはどぶろく作つてもいいし、酒作つてもよかつたんだ。そして上杉領は、そういうことは悪かつたんだ。上杉領もだんだん越後からこつちの方へよこさつちえ、少なくなつたもんだから、儉約して、上杉領もつてたんだ。だからきびしかつたんだ。

ここは御領のために、そういうこといっさいかまわなかつたんだ。そして、ばくち打ちがきたり、店があつたりして、昔栄えたもんなんだ。

昔、糠野目ぬかのめは、私領だから商いに行ったもんだ。そのとき酒が無かつたもんだから、こつちから酒持つてつたわけ

なんだ。そして左平は新しい樽にしよんべんつめて、古い樽に酒をつめてつたわけだ。そして、両方持つていったら、役人にとがめられたわけだ。役人が、

「なんだ貴様、酒の匂いにするな」

て言つて。そうしてぼろろく樽の方を開けねえで、新しい樽を開けたようなんだな。そうすつとしよんべんなんだ。

そうすつと、

「このやろう、太てえやろうだ」

てんで、まあ通つたわけなんだ。そして古い樽の酒を向こうで売つたわけなんだ。そしてこんだ、役人が今度きたとき、また新しい樽にいっぱいつめてつたわけだ。そうすると、

「貴様、何するかわかんねえ、いい、いい」

て、いつでも監察無しに通るようになった賢い男だというわけなんだ。

佐兵ばなし

(泉岡)

(その一)

みさわの金物屋さ行ってな、

「でっけえ風鈴ぶら下がってんだな」

って言ったと、半鐘を。

「でっけえ風鈴だこと」

ってった。

「馬鹿だな、佐兵」

「高えもんだべな」

「おめえのとこだば、安く売ってごべ」

そして、ばか銭持たないと思つて、安く売つたと。

「ほんじゃ、おらもらつてぐ」

って、安く買つたつて話だな。

(その二)

あわび買いに、あわびなら高かったから、

「そこの何だ」

って、聞いたば、

「あわびだ」

って、こういうわけだと。値段が高えもんだから、

「殻ばりもらつてぐかな」

って、殻こばりもらつてんだと。貝殻の方ばり。

「これは、いいお客様がいたもんだ。こういうお客様ばり

くればいい」

と思つていてたば、その数日経つてからこんだ、馬引いて

来たんだと。

「あわび皆買う」

つうわけだつて、

「先と同じ値段でいいかんべ」

と聞いたところが、

「ま、いい」

というわけだから、

「もらつてぐ」

って、かますさ、量さつめて、馬の背中を上げて、もしつてたんだ。そんで、いっぺん騙すつうと、おっかけ得するつう話だな。

(その三)

佐兵つう人よ、七ヶ宿越えて、白石へ行がねんだ。そこさ行くときな、小便つめてよ、じっばいっつって、昔、こだな、たかかけた酒樽あったもんだ。二升五合はいるべ。それをしよって行つたと。ところが、手形ねえわけだ。佐兵つうことわかつてるもんだから、

「佐兵、佐兵、何しよってきた」

こう聞いたと。

「ん、小便だ」

言つたと。殿様な、このやろうにいつでもだまさつてつからと思つてな、ビリビリ取つて飲んでみたば、ほんどに小便だつたと。大した怒つたわけだと。

「おれ、はしまえから小便だと言つたんでねえか」

と、こういうわけだ。佐兵つう人な、それ、頓智つつたらしいか、なんたらいいか、そげな事して、そうして歩つてつたそうだな。こんだ、次から酒しよっていぐだと。

食べたしようでん様

(中島)

何つう宗(宗派) 知らねえけど、お寺様があつて、おしようでん様、祭つてある。そのの寺に、うんと酒好きのお小僧様いたつたと。そいでおしようでん様さあげ申す、そのお神酒さ買つて来いて、まず、その和尚様に言われて、酒買えに、「ななび」つていうところさ、毎度行つたそうだと。

そして、行つて買つて来たところはいいけんども、とつても酒好きなお小僧様だから、佐沢にある『みやだて』つうところ、そこに、河原あつて、そして橋あるんだ。そし

て、お寺様に叱られて、こんだそうだ、そのお小僧様。

そしたら、そのお小僧様、

「おしょうでん様さ、上げ申す」

つって、みやだ河原つつう河原に少し上げ申したつつんだ。

そこらはまず、かてい^(堅い)お小僧様だったでな。そんで、

「そいじゃまず、おしょうでん様さ聞いてみる」

つんで、おしょうでん様の前で、お小僧様叱られたとき、

そしたら、おしょうでん様、

「食べた、食べた」

つった。そんで、佐沢のお寺様のおしょうでん様は、『食べ

たしょうでん』つて言った。

はん子

(熊前)

あるところにひとりの農夫がいて、毎日毎日、日照りで困っていた。そこに鬼が来て、

「おとうさん、どうした」

日照りなもんで、田が枯れてしまおうとがっかりしているもんで、おとうさんには娘が三人いるので、

「雨降らしてやるから、おまえの娘一人くれろ」

と言うので、おとうさんは苦し紛れに承知して、そうしてうちに田がみんな枯れていると、雨がザーッと降ってくる。

「いい雨だ」

と言って、田がしっとりとして、青々としてきた。おとうさんが喜んでいて、娘をやることなど忘れていると、鬼が娘をくれると言ってくる。一番大きい娘は、

「鬼のとこなどいけねえ」

そして、二番目の娘のところさ、

「どうか、おれの頼みだから、鬼のところさ嫁いってくれる。水不自由なとき、雨降らしてもらったから」

言うけど、言うこと聞かなくて、三人目の娘が来て、

「おれ、嫁いくから」

鬼は袴着て、もらいにやってきた。

六年も経過して子供がいた。はん子という名前をつけた。

おとうさんは、どうしているかと心配して、はるばる山の中に来た。はん子は遊んでいたら、

「じっちゃん来た、じっちゃん来た」

まさか来ないだろうと思っていたら、本当に来たので喜んで、

「早くおれと逃げろ」

と言って、逃げようと思って相談していたら、鬼は山に働きに行つて、そのあと、子供連れて逃げた。はん子は、

「ちよつと待つて。おれ忘れ物して来た」

大便をして、大便に、もしもお父さんがはん子って呼ばつたら、『はい』と言って返事をするように教えた。三人で

逃げた。

そして、鬼は山から帰ってきて、どこへ行ったと追っかけた。川を渡るのに舟に乗ったら、鬼は怒って水をカーッと飲んで、むせて（水を出したので、その勢いで）ひとりで舟が向こうに着いた。

シンドウ呉服屋の話

(相森^{あいのもり})

仕入れさ行つて、そこで旅館に泊まったときは、新聞紙敷いたどこさ泊まるもんでねえどつて。

そのシンドウ呉服屋の大ばんちや、その旅館さ泊まったれば、新聞紙敷いた部屋だったけど。んだから、その人、気持ち悪いつつうんだかなんだか、新聞紙敷かつたから、ずっと部屋たずねだれば、空いてる部屋あつたんだと。そこさ入つて寝たつたんだと。

夜中にその旅館の息子、ノラ息子だったんだか、その大ばんちやが泊まれと言われた部屋（新聞紙の部屋）さ寝に行ったんだと。旅館で、ガラガラしまつして、新聞紙できりつとしまつして、ちゃんとしたんだけど、自分の息子だったんだと。だから大ばんちや、そいつで命拾いしたど。仕入れに行くときだから、金いっぱい持つてるのを、見られたんだべえ。

大ばんちやが寝たきれいな部屋というのは、旅館の息子の部屋で、客がたくさん来て、自分の部屋まで使ってるんだなと思った息子は、空いている新聞紙を敷いた部屋で寝た。大ばんちやだと思って殺してみると、自分の息子だった。

化け物の話

（北和田）

中の寺のそばを通ると、夜の夜半に、寺の中で、

「そうりようさ、やりようさ、さっささっさ」

って踊ってたんだと。なにかよ、そしてまず不思議なものだと思って、何踊ったって、毎晩でるもんだから、奇怪なものだ、見やらしてくれべえと思って、度胸のいい人だか、いたわけだと。

そしたら、しめえにその踊りやめて、出かけたもんだと、その化け物よう。そしたば、寺の後ろの方さ、笹藪越えて出かけて行ったのは、きのこだったと。前の方さ出かけて行ったのは、池の所のちやぼんと入ったんだと。そしたら雑魚ざこだったんだと。

さどりのわっぱ

(川原子^{かわらじ})

ながつ川というところあるんだがな、貯水池で。そこにすばらしいかんじき作りの名人がいたんだと。で、そのかんじき、ここで、〈おのおれ〉つうけんども(とにかく、硬くて斧が折れてしまうので、〈おのおれ〉だ)このくらいな柴ぐれえなものをとってくる。山に行つて小屋がけして、そこに火たいて、火であぶつて作る。

そこに行つてみたところが、さどりのわっぱ、そのわっぱが、ひよこつと出てきたんだと。

「あれ、なんだ、おれのどこ、何しに來たと思つてるんだべな、このおじいさんは」

てんだなあ。何もとつて食つたりしねえんだけども、何も害もなにもしねえんだけども。

そしてまあ、ずっと火をたいていたもんだが(夜業でも何でもこうやつてやるもんだから)そこで全部思つたことを話すもんだから、そのおじいさんが、手を放しちやつた

んだ。そしてわっぱに、バアーツと火がとんでしまつたつんだな。下に残つた炭がバアーツと。そしたらバアーツといなくなつたつんだ。そういうようなかわつたことあるらしいんだな。

力持ちになつた住職の話

(川原子)

養善寺の若い住職が力持ちになりたいんだがどうしたらいいかと考えているうちに、市内の檀家ですばらしい力持ちの娘が死んじゃつたんだと。それが檀家もんだから、その寺の墓地に祀つたんだと。そこに毎日しよつちゅう行つてお経読んで、大力にならしてくれつて願つたんだと。すると、あるとき、その娘が墓にふんとに出たんだとな。そして、

「私の生まれた家さ、連れてつてくれ」

と。

「じゃあ、ぼくにおぶさつてくろ」

つって、おぶさつてずうっと家に着いたんだと。そして、着いたところがパツといなくなったんだと。そして、

「おまえに大力くれた」

つったんだな。だから、庭造るとつて庭石たくさん家の前に置いてある。これ、ふつうの人にやあがんねえのを持ち上げたんだと。あの娘からもらったんで、こりやほんとに力あるつて喜んで帰つてきてなあ。

ほうすつと、こんだ考えたけど、どこの寺にも釣り鐘がある。それをはずしに行くと。そしてはずしてしまった。寺では、

「いや、困った。こりやあ誰かはずしていった人がいる」
つつったんだなあ。

「人を集めてかつがねば」

いやそんなで、重くて困るときは、養善事の住職、頼んでみようかってことになった。そしたら本人がはずしたん

だから簡単にかけちゃったんだと。そうすると、こんどは、おふるまいがえらあつてなあ。おご馳走されたんだとよ。そうすると、こりやおもしろいなあと思ったから、次にはずし、次にはずし、やったんだと。そして、とぼけてご馳走になつてくるんだと。

そしてこんど、友達が高野山へ行くのに、用心におまえが行かねえつうと、おつかなくてだめだつんだ。そして経費なんか出してもらつうことで、行つたつうけどな。

そしたら上総の国まで行つたところが、道迷つちやつたんだと。そうすつと山賊が、これ金持つてるかもわかんねえつんで、たいしたもてなしで、猪獲つたのなんだのつつてご馳走するんだと。

「これはいったい何者だんべ。そうだ、わかった、山賊だ」というわけで、夜、住職が起きてみると、山賊が、どうやってあの二人をあやめたらよかんべつう相談してるんだと。そして鉄砲がいいと言っているのを聞いた住職が、夜のうちに、鉄砲をみんな曲げてしまったんだと。そして、

知らないないふりして寝ちやつた。

次の朝、

「やい、坊主ども。有り金、全部出せ」

て鉄砲で撃とうとしたが、みんな曲がっているのを見ると、

「やあ、これが年貢の納めどきだ」

つんで、みんな逃げてしまったと。そして、後は難なく高野山をまわってきたんだと。

だけど、力があるもんだから、まだ釣り鐘はずしするんだと。そして知らぬ顔でかけてやると、お茶受け出ししてもらった。そこにくるみがおいてある。ハンマーか何かでねえと割れないようなのを、簡単に手で割って食べる。そして二十貫もある鉄の杖ついて歩くんで、釣り鐘はずすのを養善寺の住職だって、だいたい感づかれるようになったんだなあ。

そして、ある家に行くつうと、おばあさんが出てきたんだな。そして、そのおばあさんが住職よりずっと力持ちだったんだと。

「すばらしい力だ」

世の中に、おれより上の者がいたつんで、また来るからと入り口に置いた二十貫のある鉄の棒を、グーツとそのおばあさん、土間にいけちやつたんだと。それから住職は、いたずらをやめてしまったんだと。

高安こうやすの犬の宮の話

(清水)

昔、高畠町の高安にムジナひとねんぐいだど。そのムジナが人年貢をとって食っていたんだと。そうして、高安には人年貢とっていかれるもんだから困っていたんだ。

踊ったり歌ったり、ドンチャン酒盛りしていたど、ムジナがな。そこへな、座頭、目の見えねえ人よ、道に間違つてそこへ行ったわけだ。そして、ジャンジャン踊っていたどきさ行ったもんだから、ムジナどもは、

「カリユウドン（狩人）でもあれば、はむかつてくるべが、座頭だからな」

つて、ムジナは小馬鹿にした。

「座頭、誰も見ねでどこさ行ぐところだ」

「俺は目が見えねえもんだから、道に間違つて来たどこだ」と。そんで、

「どうか、今晚一晩だけ助けてくれや」

なんて言つて。ムジナは座頭だと思つて馬鹿にして、

「はあ、よしよし。ほんじゃ、ずいぶん難儀してきたべ。

俺たちは酒盛りしたところだったんだけど、このことは決してよそさいつて語るなよ」

と言われたがよ。座頭のほうは、

「んじゃ、決してよそさいつて語んねがら」

つて、まず約束して、そうしていたが、座頭といったつて、本当の人間だから、

「いや、俺は語れば殺されるつづごとがあつから、語んねつてことを約束したげんども、俺は人だから、俺は殺され

ても皆のために語んなくてはなんねえ」

と、こう思つてたわけよ。そうすつとムジナは、

「三毛犬（みけいぬ）と四毛犬（しけいぬ）にだけは、そいつにだけは教えんな」

と。三毛犬と四毛犬というのは、三毛犬（みけいぬ）な、それに四色の四毛犬（しけいぬ）とな、それだけは教えねえでくろと。そいづ教えねえことを約束したげんども、座頭はこの夜は山越して行げねがら、酒盛りしてるところでこつおになつて、

「俺はどうでもいいげんども、こいづはみんなさ話して、三毛犬と四毛犬という強い犬だけには教えなくちやなんねえ」

と心に決めていた。そして、下がつてきて教えた。

三毛犬と四毛犬は甲斐の国の犬で、下海上山の竜法寺という寺で飼つていた。そいづを一夜のうちに借りでつて、高安さひいでつたわけよ。そうづつと、化げでつから人のように見えつけど、犬の目にはムジナだからな。そこで組討して、はあ、どっちも力尽きて、両方倒れてしまった。その犬を祀つたのが高安の犬の宮だ。

相撲すもうの話

(地区名不詳)

長門の国の鬼丸という相撲とりが、毎日毎日、相撲いり
がなくて、金を持たなかつた。

静ヶ山という山にずうつと来た。すると向こうから和尚
が来た。金を持たないので、あの和尚を殺して金をとろう
かなと思った。そして殺されようとしたとき、和尚さんが
「おれが殺されるのはいいが、おれの言うことを聞いてく
れる」

と言った。

「おれの言うこと必ず言つて、そして相撲とつてくれる、
そしたら必ず勝から」

そして和尚の言うことを実行する気になった。

「静ヶ山長門鬼丸僧殺なむあみだぶつ」

そう言つて相撲とると、必ず勝つた。ある人がこれは何か
唱えているなと思つて字に書いてみた。やはりあたつてい
た。その和尚が仇をとれないので、言葉によつてあらわし

ておいた。そして仇をとつた。

「静ヶ山、長門、鬼丸、僧殺、なむあみだぶつ」
と読んだ。

おりや峠の大蛇

(川原子)

「おりや」っていうのは女の子の名前で、おりやっていう
のは猟師の娘だったんだ。そして県境だもんだからジャン
グルだったのでしょう。そこら道路があつただけんども、
越後との通路だもんだから、道はあつたらしいんだ。で、
そこにいた何とかちゅう猟師の娘がな、

「おりや、おまえ、留守居してろ。だけどその味噌漬け
だけは食うなよ。そりや大蛇の味噌漬けだ。食うな」
つて。

ところが、食うなつつうと食いてえもんでな。そして父

親出たもんだから味噌出すつうと、このくれえな切れになつてるんだなあ。そいつをあぶって食ったところが味噌漬けなもんだから、とにかくのどが渴いてしようがねんだと。食っちゃったら、もう一切れ食うかなと思つたけども、やあ、のどが渴いてしようねえだ。水くんで来て飲んだつんだ。なんぼ飲んで、のど渴いてだめだつんだ。そうすつとな、川に行つて〈流し〉に行つて飲んだと。

〈流し〉ってな、水が入つてきて、その内流し外流しとあるんだが、その流しに自然に水が入ってくるようになってるんだが、汲んで飲んだんだと。

けれども、やあ、とつてもだめだ。そして今度は川に行つてこう、がぶがぶと飲んだと。それでもだめだ。これは困つたつて、水鏡こうして見るつうと、すでに頭、顔、皆すつかり大蛇の姿だ。

「いやなんだ。こいじゃだめだ」
と川さざんぶり入つちやつて水飲んだ。そうすつとこんだ、家にも帰れなくなつたんだと。

「これじゃとても帰れねえ。」

つんで、出てしまつたんだと。ほいだけど、そういう大蛇だつたつてこんだ、食料が大変だいな。山や野良にいる動物を呑んだり、人を呑んだりしたんだと。

そうすつと、あそこの峠さ行かんねえ。おりやが巢食つてるから、「おりや峠には行くな」ということだつた。そして「夜は通るな」と。「夜はあそこは怖いから行かねえ」と。そして日中ばかり交通するようになったんだな。

そしてこんだ峠の両方のふもとに宿場町があるんでしよう。そうすつと「あすこ行くなよ」と。だけどそこんとこ目くら通つたんだと。夜だと昼だとねえんだがらな、目くらは。

そしてとにかく「行くな行くな」と言われたけども来てみたら、宿屋の人に何度も言われたけども来てみたら、ぶつついていったところが、人のいかげするもんだから、肌さ感じたような気がするな。目くらだつうと一間ぐれえ先の柱わかるぐれえのもんだから直感した。

「だれかいるな。おまえ誰だ」

と聞かれたんだ。

「俺は目くらだ」

と。そしてそれは、

「俺は、おりやだ」

と。こんだほんとのおりやの姿にその大蛇が化けて来たんだ。そして、

「今日は月夜だから、俺、浮かれて出て来たんだ。俺は大蛇だけんど、おまえを呑まねえ」

と。だけんど、目くらは大蛇がおじくってワナワナと震えたつつうんだなあ。

「だが、俺は蛇は怖いもんなあ」

つつたんだと。

「呑まないよ。おまえ、蛇怖いだろうが、俺の一番怖いのは金物だ。鉄だ。体さ鉄で傷つけられつと、毒で死んでし

まう」

と言ったんだと。

「だけんど、これ決して言うなよ。言ってなんないよ」

と。そしてそこで、

「わかった」

つつて、次の越後側の宿場に行つて、やれやれつつて、言われたこと言わねえで宿場に入ったっけな。

でも目くらだから、あんまやつたんでしよう。そんなとき、話の種尽きちゃつたもんだから、それしやべつたんだと。

やつとうの刀でもなんでも、刀差した武士でも何でも呑んでしまうんだから、そだ事あんべかなつつうわけだ。おりやは人を呑むとき、毒だつつう刀さ呑まねつつう話あるもんな。

ところが、新潟県に、ここの本間様みてえなすばらしい豪家があるんだもんな……

……(録音テープ音声聞き取れず不明)……
渡辺つう……(不明)……

「よし」

つんで鉄の杭刺して、そこんとこ三重にも七重にもまいて

しまう、そう考えたわけだ。そんなことをしているうちに、その坊主、大蛇と言わねえと約束したこと言っちゃって、ころっと死んじやった。

それからこんだおりや峠へ出かけて行った。大蛇は食いつきたんでしよう。刀を、向こう側に、その大蛇を鑿たがねで傷つけて七重にもザアッとこやったところが、こんだその大した大蛇が白骨になって死んじやった。

そして今でも「おりや峠」つう名前が残ってるんだ。そしてそこには「蛇灰石じやくいせき」つうのがあるんだ。そいつは血止めになるんだ。

三匹の老狐

(川原子)

八ヶ代やかしろに法隆寺があり、そこに、三月に老狐が三匹いたつっんだ。だけど、孫蔵という困った狐とりの名人がいる。

これには困ったつうわけだ。

「かまわずおくと、われわれの種族絶えっちゃう。どうしたらよいか」

つう相談したんだと、その三匹の老狐がな。そしてその孫蔵つう人がどんな方法して獲るかつうと、ねずみの中から揚げをひょうたんの中に入れて、そこをそれ食いたくてこうやってるうちに、深ぐ中に入っちゃうんだと。息つけねえように。そいで死んじやうんだと。だけどそこは野生の動物だから、そこでもう自分捕えてるつうことをさとりが早かった。

ところでその八ヶ代の狐は地方の棟梁になってるんだと。そうだけこんだは、京都の伏見稻荷で格式とつてくるつんで出かけた。

ところが、三匹集まって相談したら何でもできたもんが、えだ八ヶ代の狐が伏見稻荷に行ったもんだから、何でもできないうようになった。

ところで、そこに常敬寺つう武士が建てた寺があるんだ

な。そのこの住職に、狐の巻物があるのだが、それを頼んで
な、

「誰が来ても、それを見せないでくれ」

って言った。その八ヶ代の狐が、そして伏見稲荷くだつて
いったもんだが、二年ばかしたつてな、すぐ帰つて来るよ
うになるんだからと頼んでいったところが、他の狐が、

「巻物はねえか」

と来た。その来方がおもしろえんだ。狐は家来に化けて来
た。忠臣蔵のとき出てきた千坂兵部つてあつたでしょう。
あれに供ぞろいしてかごに乗つて来るんだべなあ。そして、

「狐の巻物つてあるんだべ」

「そんなもんねえ」

「いやちつとも来るしゆうないから、どこでもいいから捜
してみてくれ」

と。そしてその押しに負けてしまったんだと。ところがそ
ういうことが全部八ヶ代の狐が黒糸にぎつてゐるってわかっ
たんだそうな。なんつうこともなかつたけんども、二年た

つて帰つてきたんだと。

和尚様にはずいぶん心配になったで、和尚様すんげえお
茶好きな人で、茶の湯の指導してる。だからその茶の湯の
釜を買つてくんべと思つてな。京都の町探して買ったんだ
と。買ったつたつたつたつたあ、金置いてつたつたつたつた木
の葉だったべつつんだ。そして釜をかぶつて蓋の方をくわ
えてきたところが、宇都宮あたりに巻狩りがあつたんだと。

いや逃げた逃げた。そんで走つたもんだから、ハツハツて
こう息つきちやつてな。口から蓋落としちやつたんだと。
その、落としたけどもたえらんねつていう蓋を、だから常
敬寺にあるそのやつは、蓋なしの茶釜があるんだつつけな。

そしてこんだ、二年過ぎ帰つてきたもんだから、また三
匹の狐が集まつてな。常敬寺の和尚様の前に立つて、

「糠森山ぬかもりというキリスト教の処刑されたところ、そこにおいて

その山からここまで虹の橋かけてみせる」

と言つたんだと。三匹の狐がな、

「常敬寺へ虹の橋さ渡つて仏様呼ぶから」

と。和尚様、

「そうか」

と。狐は、

「だけどひとつだけ話しある。拝んでもよいから、決してお経読まねえでくれ」

と。

「あつ、承知した」

つて和尚様言ったんだつうけど。そのうち一町もあるような長い場所サーツと虹の橋がかかってな。そこに金色の仏様スーツと並んで阿弥陀様と先頭にズーツと渡って来られるんだとな。拝んだと同時に、やっぱりその僧侶なもんだから、お経読んじやったという。そうすつと、虹の橋がパーツと消えてしまったという。そしてこうりゆう寺の縁の下に巢食つてた狐がびっこになつちやつたんだと。狐は、

「だから、お経読むなつて言ったんだ」

つった。

そして、とにかくなんじよの方法したら良かんべと、三

匹の老狐が集まって相談したんだと。とにかく上岡と和田に孫蔵のおじがいると。だからそいつが、かわりがわりに来て、

「獲んな、獲んな」

つて忠告するようにつて決議されたんだなあ。そしてその和田のおじさんが来て、

「孫蔵、狐は獲んなよ。獲つてなんないよ、獲つてなんないよ」

つて、同じこと言うんだと。それからこんだ上岡のおじさんが来て、

「獲んなよ、獲つてなんないよ」

つてさつきと同じこと繰り返すんだ。

「なんだ、いやあれ狐だ」

つて孫蔵感づいたんだ。

「よし」

つつんで、今度はもうとにかくいっしょうけんめいねずみ獲つて、そしてねずみのから揚げ始めたわけだとな。そし

て狐を獲ったんだと。こんだ、獲ったんだと。

弥三郎ばんば

(船橋)

弥三郎ばんばは、(おっかな橋)のすぐ近くにすごい池があつてな、その池の中さ、昔、往來の人を皆殺して、そして金を取つてその池の中にぶちこんだ。

ある人が赤ちゃんおぶつて通ると、その赤ちゃんのお尻さ、針で刺したつうだ。針ちつくらちつくら刺すもんだから泣くわけだ。つうと、

「ねえちゃん、ねえちゃん、赤ちゃんが泣くからおろして乳飲ませろ」

てこういうことだったそうだ。そして、まず乳飲ませた矢先、その赤ちゃんをガーとさらつて、とばしてやって、はあ家へ行って、血吸つたのなんのつて話があるさ。

ある夕方、そこを侍が通つたと。そしてそこ通つたとき、あそこにすばらしい鬼ばばがいるつていう話を聞いたものだから、

「おれが退治してくれましょう」

と思つて、そこさ立ち寄つたと。退治しようとしたら、すぐ金取られるとこだったと。そしてら鬼ばばの腕を切つたと。そして鬼ばばが血だらだらたらし一本柳いっぽんやなぎつうとこさはつてたと。そして小さいわら小屋に入つて、ウーンウーンてうなつてたと。そしてその侍が行つてみたら、血たらしたとこ辿たどつていくと、自分の家だったと、前(以前)ど自分が育つた家。そして行って訪ねて、

「ここへ泊めてける」

つて寄つただけど、うんうんうなつてるもんだから、

「かあさん、かあさん」

て言つたんだと。自分の家、おかあさんがいたと思つて。

そして、

「俺、ちよつとてがらしてきた」

て侍が教えたんだと。

「これ、腕持ってきたから見て」

てそのおばあさんの前さ、片腕出したと。そしたら、そのおばあさんが、すばらしいまづけんまくで、

「その腕こそ、おれの腕だ」

つうて、破風から雲呼んで、飛んでつたつう話聞いたもんだ。

そして、その飛んでつた先が、新潟の弥彦山さ飛んでつたんだと。今だに弥彦神社に祭られてるわけだ。

そして、何のために往来の人妨げたかつうと、お前のために私が軍用金を奪ってたつうわけだ。

後述・・・(今でも、われわれが、一本柳にお参りに行くと、新潟の弥彦では、こつちを恋しがって荒れる。それで天気が悪くなる。)

船坂しんべえの話

(佐沢)

船坂しんべえつうは、長年、白石吉兵衛という、そのたまりやの家で、むかしの旦那にうんとかわいがられているもんだつたそうな。で、その旦那がある日、その、

「おれの家の蔵を破られつか」

と。そしたら、

「そんなもん、造作ねえ」

と。

「どのくれえな時間で」

「どのくれえつて。そんだらだ、この竹一本持って来て、これを、一、三寸くらい皮切ってける。そして、切り上げたら持って来てくれ。その間にぬすんできてやるから」

というようなこと、ほんと、それ、いしけんで、その旦那が切ってるうちに、破ってきたつてその宝物かなんか(持つて)。そんで、その、

「なんじょうして破ったか」

つうと、その、

「鋸のこぎりないてる音と合わせて、鉄格子だか何かを切り開いて入った」

つう。そういうその当時なかなか機転がきくつつうんだが、頭がいかったと、泥棒にしては。そいでその人が、絶対に破らんねえ蔵を建てることを吉兵衛に教（教えてやっつて）えられて、いま端に残ってる蔵が建ったんだ。

そういうこと、実際に聞かせらっちなけんども、その蔵を何にしたかつうと、今ならば、こんくれえなんか研究して造れつこと両方から塗り上げる、この境さ、ざあつと砂に小砂利をつんで、そうすと、破ったつて、ずうずうとこけてきて、破ったつて、穴んなんねえで侵入されねえ、そういう仕掛け造ったもんだそうだ。こういう蔵（注釈）をその泥棒に教えられて造ったということを聞いたことあんな。

（注釈）蔵：これは、今は米沢市になった長手というところにあるそ

うである。

大和屋の伝説

（相森）

大和屋つてよ、昔、大っきな呉服屋だったんだと。大和屋が仕入れき行くとき、昔だから、汽車も何にもねえから、峠越えて、東京さ買出しに行くときの話だけだよ。

大きなビッキがガマでもあったのか、そいつがへびに呑まれつとこだったんだと。そして、そいつ助けたんだと。買出しに行く大和屋の旦那だべっけが。

そしたらあるとき、そこさ、きれいな若者に化けて、へびが来て、そこさ婿に入ったんだつけど。そしてその娘さ婿もらつて、お産するようになったんだと。難産で難産で、いつかもいつかも、もよおすけつども産まにやあだと。そして何ともしたらいいかと思つて、聞いたり拝ましてもらつたりしたんだつて。

そしたらば、その何か高い木のタカの巢とか何かあつたつうどな、何かとつてきて、かせつと、病気は治るとか言つてな。そいつは高くてよ、普通の人で登つて行がれ

ねえとこだったんだと。そして、みんな番頭たちといっし

よに、そこさ行くけんども。その婿がな、

「みんな、まなこくつついててけろ」

とかつて、へびになって登っていったんだと。それを、みんなが見ていたんで、バタツと落ちて、そのまま姿を消したんだと。そこさお産の手伝いがきて、お産してみると、へびだったと。へびの子はやっぱりへびだったんだと。

一匹逃げたのがいたつだと。そいつがその蔵の主だ。

そしてその家は、だんだん、だんだん落ち目になってな。そして、その旦那がそのへび蔵に、年トりの日に、米もつていかななんねかったと。入つつど（蔵に入つてしまつと）、みんな体弱くなって、今もつて権現たてて、誰もその蔵さ入んねど。もうなんにもねえだな。その家よ。つぶれてしまった。

婿になったそのへびは、ビッキを食べそこねた仇を討ちに来て来た。そして、お産すつとき手伝いに来たのが、ビッキだった。お礼返ししたんだなあ。

鈴沼の話

(高安)

ちようどこの上の「塩森しおのもり」という部落に「館だて」という殿様だったか・・・名主だと思っただけんどな、そこさ嫁に行つたんだ。

ここの部落のやつぱし名主とか何とか、嫁に行つたとき、その「清水しみずヶ原溜池がはらためいけ」という池を持参して嫁に行つたんだ。そのときは、清水ヶ原溜池は、この高安の所有にあつたんだ。その池さもらつて、のぞみ嫁の名前さんは塩森さ嫁いで行つたつてわけだな。

ところが、縁つたなく、やつぱりその、不縁になつたつてことだな。その際、本人はやつぱり返さつてしまつたけんども、もらつていったものは、向こうに置いてきてしまつた。ということ、地図が、大字高安鈴沼つてことになつていゝるんだけんども、現在はこの部落を主体にした、清水ヶ原溜池組合つのが、六ヶ村で経営してゐるんだ。

普通、鈴沼、鈴沼つてよんでゐるんだけんども、正式に

は、清水ヶ原溜池というんだ。この年、三ツ返山も、そのときから持つて行ってしまった。

寛文年間のことだそうだ。

めると、その病気は治るって言わっちゃと。そういう話が
あったんだ。

子育て地蔵の話

(北和田)

子育て地蔵ってあってな。子供ら喜んで水遊びして、その地蔵様の人形を出して、遊んでたわけだ。そうすつと、どこの人だか知らねえが、

「お前ら、そんなことするもんでない」

て、とがめたわけだ。そうすつとその人が病気したわけだ。

そうして、その人が占ってもらったば、地蔵様が子供と喜んで遊んでたところを、とがめらっちゃから、そのため
の病気だからって、ちゃんとその地蔵様さ新しく買って納

【第二部】夏の章

(福島県耶麻郡西会津町の概略と地図)

西会津町は、福島県耶麻郡やまに属し、西側は新潟県と接している。町の中央には阿賀川が流れ、この川をはさんで、南北に細長い形をしている。また、冬には雪が一メートルも積もるといふ豪雪地帯でもある。

この町は一九五四年に、野沢町と、尾野本おのもと・登世島とせじま・睦会むつあい・下谷したたに・群岡むらおか・上野尻かみのじり・宝坂ほうさか・新郷しんこう・奥川おくがわの九村が合併してできた新しい町である。しかし町には大山祇神社おおやまづみ・如法寺にょぼう・鳥追観音・伊豆ヶ原の観音堂など重要文化財も数多くある。大山祇神社は山の神を祀った神社であるが、毎年六月には大山祭りが行われ、隣の新潟県からも多くの信者がやってくる。

部落数は九十一で、戸数四戸のものから、二百三十九戸のものまでさまざまである。人口は約一万三千二百人である。町の北部に位置し、木地師の部落である弥平四郎部落、



昔会津藩の島流しの場所であったという極入部落、弘法大師の岩がある安座部落などがあり、また部落間で結婚をしないという風習も、昔はかなりあったようである。

生業は主に農業で、たばこ・米・ホップを作っている。また、ほとんどの家では会津桐を植えており、養蚕を行っているところもある。

ばかむこの話

(青坂)

ばかむこが嫁の里に年始に行った。かあちゃんが心配して、行くときに、その家に行くのと立派な碁盤があるから、それが出たときは扇を出して、ポーンと一つはたいて、

「まことに結構な碁盤でございますな」

と、こう言っただけなさい。それから、節穴が一つあつから、これは、

「十三仏でもかけなすつと、まことによくありますな」と言っただけなさい。そうして行ったところが、挨拶の言葉を忘れてしまった。

「はてな、こりやどうしようかな」

いろいろ考えていったところが、ちょうど途中にきこりがおつて、大きな松の木を切り倒しておつた。ワツサワツサと。それに見とれていると、しばらくしてガラガラワツサーンと木がおつこつたわけだ。きこりのところ行って、

「実は、今日はじめてかかの里へ御年始に行くんだが、挨拶

をひとつ忘れちゃった。何と言ったらよかんべかなー。じいさん、年がらだ、ひとつ教えてくつてえー」とこう言っただけ。そしたら、そのきこりは、耳が遠かった。それで、

「ああ、そうだな。これか。これは根っ子の方は臼にして、真ん中は板をひいて、うらの方は杵きねをつくんだ」

こう言っただけ。

きこりは自分の倒した木をどういうふうにすつかと、聞いたと思つたらしいが、馬鹿むこなもんだから、それをとらないで、ああいいこと聞いたと思つて、そのまんま、まづお会いしたら、それやったっていうんだなあ。

「まあどうも、根っ子の方は臼にして、真ん中は板ひいて、うらの方は杵を作ります」

なんだか、つっけんどんな挨拶されて、

「はて、聞いたこともない挨拶だなあ」

と思つたが、

「まあ、それはいいわ。庭へでもあがつて」

て、庭へあがった。

「なんか碁盤でもあるかな」

とキヨロキヨロしておったところが、八十ばかりになるおじいさんが、寝巻きのまま出てきなされた。それで、ろくすつぽ帯もしてないから、前の方が広がって出てきたわけだ。六尺ふんどしをまいてるわけだ。たまたま、そのじいさんが、こんな大きな脱腸で、六尺ふんどしでうんつらうんつら出てきて、

「婿^{むこ}どの、よく来てくださった。わしや持病でこのとおりよ」

なんて、前広げておすわりになったけんども、肝心なものが前へ出てるわけだ。赤くなってるね。

したら、その婿が

「碁盤とはこのことだな。ほめるのは、このときだ」

とばかりに、扇をガラリと腰からぬいて、その大事なものをポーンとなぐりつけて、

「まことに結構な碁盤でございますな」

とこう言ったと。日頃どうしようかと思ってるころを扇でなぐられたもんだから、じい様、いてもたってもいらなくて逃げて行ってしまった。

「やあやあ、これはとんでもない婿だわい」

と思った。そうしているうちに、今度は若い姑^{しゅうとめ}親^{おや}が出てきなされた。

「おらのうちの馬、この付近ではめったにいない馬だ。見てくれ」

てわけで、馬屋から馬を出して、ドウドウとこう、たてがみをおさえて、二、三度まわしてみた。まことに品のええ立派ないい馬だった。ところが、馬鹿むこなもんだから、馬出されたってほめようがない。(はてどうしたもんだかな)と一生懸命見たところが、馬の尾っぽの後ろの方に(へばこたれ穴)があつたそうだな。それを、

「先に、十三仏でもかけてほめなさい」と言われた節穴はこれだなと思つて、その馬を出し終わったとき、

「いやまことに立派な馬だが、困つたことに節穴がひとつ

あります。ここへは、まあ十三仏の掛軸でも掛けたら、まことに立派なもんになりましょうなあ」とこう言つてほめた。

全くもつてばかむこの評判どおり、とりえがなくつて、姑の家でもあつけにとらつちやつたという話があるそうだ。ざつと昔さかえました。

ますびきと猿

(青坂)

昔、この付近の山で猿なんかもちよいちよい出たそうだ。何かの祝いで、この家では餅をついていた。そのつく音が、ペタンコ、ペタンコと山の上まで聞こえるわけだ。すると猿が、何とかしてあの餅を食つてやるべえと思つた。ます^(注釈)びきと相談した結果、ますびきに、

「お前は、裏の井戸へ行って子供の泣き声をしろ。その間

に家の人はびっくりして、子供でも落ちたんじやないかと思つて行くから。その留守に、おれが白ごと餅を山へ持つて行つちまう。そしてうまくいった場合には、お前と半分ずつして食うべ」

とこう言つたと。そして、そのとおりはじまつたわけだ。そして家での、ギャーギャー泣くもんだから、

「子めら、ためさ落っこつたんべ」

と餅つきなんかはんばにして、裏の井戸へ行つたわけだ。その間に猿が山へ運ぶわけだ。猿もやれやれ、大汗かいて、ますびきも見つけらんねえように、やつとこすつとこ任務果たして山へ登つたわけだ。

「さてそこで、相談だが」

猿が欲を出して、「こんなええ餅、ますびきにくれるのはいたましい。一人で食つてくれましょ。」と。そして考えたことには、ますびきに、

「こんなええ餅、ただで食つたつておもしろくない。どうだ、ものはひとつ賭け事だが、この餅こつからまくから、

その臼にくつついて行け。早く行った方が餅を食うことができる」

とこう言った。ますびきは、猿より遅いに決まってるから、（なんだ、そんなこと言って、おれにくんねえで済ますつもりだな。）と思った。けんども、何とも猿の意が強かったから、いやいやながら承知したわけだ。そいで、

「さあ、まくぞ」

猿が臼を横にしてまくりだした。ゴロンゴロン、ゴロンゴロンと臼は馬力出して、下の方にまくれて行くわ、猿は食いたい一心だ。それこそ、臼の上なり、下なりして行ったわけだ。

ところがどういうわけか、臼は行ったけれど、餅は途中にひっかかっちゃまった。ますびきは、あきらめてたけれど、しようがない。一ちぎりももらえるかもしれないからと、あきらめながら、ペタンコ、ペタンコと下りて行ったわけだ。ところが、途中の柴枝に餅がづらりと枝に下がってひっかかっていた。

「ほんに、これはしたり」

とますびきは、一生懸命になってあの大口あいて、パクリと目玉てっころがしながら、存分に食った。

一方、猿のやつは、一人で食ってくれようについて行っただけで、中見たら一つもない。

「やあやあ、こりやしもったことした」

と思つて、振り返つて後ろ見たところが、どうだろう。真ん中ころに、ますびきがもう息も絶え絶えになるほど、腹こんなにくらまして、一人で食つてたつた。ごじゅつぱらやけるわ、くたびれるわしたけれど、まあしょうがない。臼をおいて、がらり引き返した。そして見たところが、あらかし食っちゃまった。今度、ごじゅつぱらやける。

「こんちくしょう」

と、猿がますびきの満腹なところを足でおつつぶしちまった。それで、そのますびきは、生きるためにこらえて、うーんがまんしたところが、背中にポロが出たというわけだ。ということ聞いたなあ・・・ざっと昔さけたど。

【注釈】ますびき(ますびつき)・・・ヒキガエルの俗称

ホトトギスの兄弟

(出いでヶ原がはら)

毎日毎日、夜中になると、夜中から朝方にかけて、ほととぎすが、

「ほつちよんかけたか、ほつちよんかけたか」

と鳴くの。その物語の根本は、昔、意地の悪い姉妹がおつたの。そのうちの妹の方は、なおさら意地が悪かったって。

それでこんどは、お姉さんばかりおいしいもの食べて、私にばかりまずいもの食べさせるんでねえかなつつうわけで、夜の夜中に、姉さんを包丁で突き刺して殺してしまつたんだと。そして胃袋を開いてみれば、やっぱり自分と同じ食べ物食べてやった。

それで、お姉さんに申し訳ないために、お姉さんのご冥

福を祈るために、夜の夜中に、口から血を出して鳴いているといふほととぎすのいわれ。

狐に化かされた話

(真まヶ沢かざわ)

お葬式に行った帰り、わたしは荷物をしよわなないで空身で帰ってきたんです。ところが、峠を越えて下がってくる、娘さんが茅かやを刈っているんですね。わずかな茅を二、三ばかりで、そして私が下る。その娘さんが登ってくる。それで挨拶して、

「日が暮れるから、早く帰んなさい」

と挨拶したわけだ。そうすつと向こうで黙ってるんだね。手ぬぐいかぶってるから、年はよくわかんないけど、だいたい若い娘さんで見うける。それからどんどん下がってくる。何回も通ってる道だから、間違うはずはないんだが、

どうしても車の通る大きな道に出れないんだね。同じ道二度歩いた。それから気がついたのが三回目だね。

「はて変だな」と。

「三回来たから変だな」

と気がついてみた。ところが四方真つ暗。どうにも歩けない。なんとか車の輪だちの跡の所へ出たいと思っっているけど、それができない。しょうがないからこんだ四つんばいになって、車の跡をさがすんだね。ようやく見つかった。

これで大通りに出たなって安心して歩くには、足元が見えない。手探りで、車の跡について行った。ついていってまた、もとの道に戻っていつちやったんだ。

「これは、いわゆる狐に化かされてるんだ」と。

ここでタバコをのめと火を見せると、やろうども、おっかながつて逃げるそうだから、タバコのもうと、当時、杉板をまとめたのが、腰掛けるのにちょうどいい高さになっ

てたから、そこに座ってタバコをのんだ。タバコのんだだけでは連中だめだから、

「よし、この杉板一つ火をつけてやる」

というので、杉皮引き抜いてどんどん火をつけた。そしてその火が燃えきるのを見て、これで何とか道がわかると、ひよつと気がついて西の方を見ると、入日がかすかに西の方が明るい。

「ああ、あの西の方向けば大丈夫だ」

って。こんど西の太陽が沈むいくらか明るい方向に明かりをたよりに歩いていった。しばらくたつと、子供の音がする。子供が、

「おかあ、早く帰んべえ、早く帰んべえ」

人家から約二キロ離れてますかね。

「ああ、これは人家が近いんだ」

子供の音をたよりに行ってみると、小さな作業小屋があった。その作業小屋に行くと、子供は近所の子でよく見てる。

「おまえ、おかあちゃんと来たのか」

つて聞きいたら、

「うん」

母親のそこ行ってみると、いくらか明るい。さつき暗かったのになつて。結局この作業小屋に来たとき、子供の顔がはっきりわかるんだから、離れたんだ。それから作業小屋で母親が仕事しまつて、かごに何やら野菜入れて、しよつてくる。

「この辺に、狐いるか」

つていうと、

「いる」

三人で帰つてくる。

お釈迦様の話

(弥平四郎)

あつたど昔々大昔に。狐とうさぎが、野原にいたつたんだそうだ。ところが毎日毎日野原を（かけめぐつて）かけめぐつて歩いていんだけど、うさぎは苦しい苦しい、ただ草だけ食べて、そして、何も他のものは食べらんなかったんだと。ところが狐は村へ出てきては、他の鶏をとったりしていたところが、ある日、大雨が雷がひどくなつて、いてもたつてもいられないときに、一人のおじいさんが野原を通りかかったと。そして、うさぎのいたとこで、

「ここらで山小屋でもないか」

と、おじいさんがうさぎに聞いたところが、

「山小屋はないけど、あそこに大きな木の根元にほら穴がある。そこへ行って入つて雨宿りしたらいいでねえか」

とうさぎは親切に教えてくれた。そしてところが、狐は夕方また、

「おい、うさぎくん。今日は何かうまいものあつたか」

うさぎは、

「相変わらず何も無い。おらは草ばかりしか食べられないんだ」

ところが、狐の方は、

「今日は魚食べたんだ。俺は毎日毎日、魚と肉と有り余って困るんだ」

と大いばりしていた。それで、じいさんの前でその話をしているんだ。したら、じいさんが、

「お前たち、俺は、腹へって動かんねえだ。疲れて明日にも死んでしまうから、俺の食うもの何か見つけてくんねえか」

と言ったところが、

「そんな、わけねえだ」

狐の方では、

「俺、鶏持ってくつから、鶏(じちせう)つつおすつから」

と言つて、村から盗んで持つていって、じいさんに食べてもらった。ところが、雨が相変わらず二日も三日も止まず、

雷は止まず、びしょぬれになって、うさぎは夕方、しょんぼりと帰ってくるだけで何も持つてこれなかったと。

それで、こんどはある日のこと、うさぎの方では、

「狐、あんなにあのじいさんにいろいろな魚だのお菓子だのいろんな物持つてきて助けてるのに、俺としては何にも持つてくることはできねえんだ。はて、どうしたらいいだろう」

と、うさぎは考えていた。ところが、

「じいちゃん、何にも持つてこれなくなつてすまなかった。おれの行くところは何にもないんだ。狐はどこへでも行つて、鶏でも魚でもお菓子でも持つてこられつけども、俺は持つてこれねえ。それで、夕方は必ず持つてくるから、ここへ、どンドン、大きな火たいておいておくれ。雨の降るときに、どんどんと火をたいてもらえつと、焼いて食べるから」

と言つて、探しに出て行つたけど、何時間たつても帰つてこないから、

「はてな、今日はずん^(背負つて)と見つけたから、きつとしよつて来

らんねえんだろう。うさぎ、火たいておいてくれなんて言ったから、きつと何か持ってくつだろう」

と思つて、狐は一生懸命じいちゃんと二人で火をたいていたと。

夕方暗くなるきわに帰ってきたうさぎを見たら、相変わらずびしょぬれになっていて、しょんぼり帰ってきた。

「じいちゃん、申し訳ありません。何とかして、じいちゃんに何かやりたいと思つて、一生懸命なつて歩いてみたけど、何にもなかった。そのかわり、ささげるものはこれしかないんだ。どうか、これを食べて丈夫なつて家へお帰りください」

と言つて、その今まで、ボンボンと燃えるさかえる中に跳び込んで、わが身を焼いてしまったと。

ところで、おじいちゃんは、

「ああ、感心だ。あれほどわが身を焼いて、俺の命を救ってくれるという気持ちは世の中の鏡にしなくてはならない」
こういうことで、そのじいちゃんは何であつたかという

と、お釈迦様であつた。そのお釈迦様が、夜には世界の鏡にしようというわけで、お月様にうさぎの形を取り入れて、うさぎを、生涯忘れてはだめだということを残していったとき。

鬼んばの話

(弥平四郎)

昔々あるところに、夫婦で子供三人もつて山の方で暮らしていたんだそうだ。親父さんは猟師で、魚を獲ったり熊を獲ったり、いろんな仕事に従事してその日暮らしをしていたと。お母さんは畑で粟あわだの稗ひえだの、そのころ野菜などはあまりなかつたらうから、山菜などで子供のまかないをしていたと。

ある日のこと、お父さんが猟に出て、そして暗くなつても帰つてこないの、お母さんが夕方迎えに出ただけで、

それも帰ってこない。お父さんは行方不明になって、とうとう見えなくなってしまった。お母さんも、乳飲み子おぶって迎えに出たまま帰ってこない。子供は太郎、次郎、三郎といったが、その上の二人でいくら待っても帰ってこない。どうしたらいいだろう。泣きながら寢床でふせっていたところが、夜中に、ドンドンと表の戸をたたく者がいるから、太郎が、

「お母さんきたじゃ。行ってみなきやなあ」

と表出てみて、

「お母さんか」

「ああ、そうだ」

「声が違うな」

「いや、お母さんだ。戸を開けろ」

表の方で言うから、しかし、お母さんの声ではないから、どうしても開けられない。開けろ、開けないと押し問答して、その戸の隙間から手をそろつと中へ入れたと。その手を触ってみたら、毛がもしやもしや生えていて、人間の手

のようではない。ますます、子供らは怖ろしくなって、

「お母さんでない。お母さんはそんな毛の生えている手ではないんだ。つるつるした手なんだ」

子供だからそう言ってやったら、

「そうか」

ってまた戻って行って、しばらく二時間ぐらいすぎたら、また、ドンドンと戸をたたく。子供らは怖ろしきにあまり眠ねえでいたと。だから、戸をたたくからまた出てみた。

「お母さんか」

「お母さんだ。戸を開けろ」

手を出してみると言ったら、戸の隙間から入れたところが、つるつるしているからお母さんだと思って、入れたところがお母さんではなかった。その指には里芋の葉を巻いて、ごまかしてやってきたわけだ。そして、

「はあ、お前たちも辛かったろう。お母さんが帰ってこなくて」

太郎も、お母さんではないんだけど、お母さんらしくし

てるから、がまんして寝たところが、プリンプリンで何か食ってるんだ。次郎は少し兄貴よりも、頭の方はよかったんだろうが、

「お母さん、その食べてんの次郎にもくれ」

そしてくれたところが、赤子の指であったと。そうすると、

「赤子の指ではこりや食えないから、確かに、お母さんはこれに殺されたんだ。弟はこの指に相違ない」

そして弟は今度、(兄と)相談して、お母さんに化けた鬼んばが、スコンスコンといい気で寝ている間に、弟と兄貴は相談して、

「確かに、これは弟の指に相違ないんだ。だからここにいちや、我々も食われてしまうから、兄貴どうする」

「いや、お母さんだから」

兄貴は少し頭の方が悪かったから、

「どうしても、お母さんだから」

「いやそうでない。こんな人間の子供の指食ってるお母さ

んがいるか。早くここを逃げださないとこまんた。逃げ出そうじゃないか」

と相談決まって、その鬼んばの方を見ると、鬼んばは安心しきって、いびきかいてゴロンスタゴロンスタと寝ていたと。

そして、兄弟二人は何とか寝てる間に逃げ出せば助かるだろうと、どんどん、どんどん逃げ出して行って、二里くらい行ったところに大きなお寺があった。そのお寺に逃げこんで、戸を開けて、

「助けてくれ」

坊さんが、

「なんだ、暗いうちに何事で来たのか」

と言って、一部始終を話していたところが、そのお寺の住職は、

「お前ら、ここにいれば、我々まで食われてしまうから、どっかいいところあったら隠れなさい」

とこう言って聞かせらったので、弟は、昔、鉤かぎがあったん

だが、そういう鉤を借りて、

「あの大きな池のよこの柿の木へあがろう。あそこの上だつたら、鬼んばもわかんねえだろう。だから、兄さん早くあがれ」

と、二人は鉤ひっかけてあがつて、夜明けんの待つてたら、髪を乱した鬼んばが一生懸命追いかけてきたつてもんで、木の上で、二人で声もたてずに隠れていたところが、

「ああ、のどが渴いた。水でも飲もう」

と、この池のよこの顔入れたら、二人の顔がその水鏡に映つていたと。

「あれ、水の中に入っているわけはない。木が生えているからこの木だろう」

そしたら二人は固まつていた。そしたら、その鬼んばのやろうが、

「こらこら、どうしてそこへ上がった」

「お寺から鉤を借りてきて、そして木のまたへ引つ掛けてここまで上がった」

と、兄の方は正直に言つてしまった。

「そうか」

と。弟の方は、気いいもんで、

「どうしてそんなこと教えたんだ。我々は食われてしまうから、早く逃げなくてはなんねえ。もつと上へ上がろう」と言つて、まだ枝から枝へ、木登りをしていったら、鬼んばは、お寺から鉤を借りてきて上がつてきた。

そのときに、弟の方は、どうか助けてくれと、一心に神を信じたところが、鬼んばに足を押さえられるようになり、もう危機一髪のところまで追い詰められたときに、上から鎖がザアツと、二人の前に下がつてきたんだそうだ。

「太い鎖だから、二人でつかまつても何とかなるだろう」

と言つて、助けの神だと思つて二人がつかまつたら、その鎖はだんだん、だんだん上の方へ引き上げられて、鬼んばと遠くなつてしまった。鬼んばも、

「おお、悔しい。ここまで追い詰めて、あの野郎ども食わねえではいらねえ」

と、ひとり言を言いながらやっていたところが、その子供らの鎖はだんだん、だんだん雲かすみと上へ上へ上がっていく。

それから、隣の手の届くところにもう一本の鎖がさがってきた。ああこれは天の助けだと、鬼んばがそれにつかまったと。だんだん、だんだん引き上げられて上の方へ行つたんだと。そして高い高い雲の近くまで行ったときに、鎖がプツンと切れて、鬼んばは、鎖もろともその池の中にドボンと落ちたまま浮かんでこなかった。

そして、子供は無事助かって、お月様になったんだと。昔、おばあさんに教えらった。

継子いじめままこ

(宮野)

どこの国だかわかんねけど、昔アイヌ山なんて山があつて、姉のお玉と妹のお杉がいた。

姉の母親が死んで、後家さんもらつてできたのが、お杉なのかな。ところが、お杉の母親は（お玉を）かわいくなくていじめたんだ。秋になれば、栗拾いに、お玉には穴のあいた袋を持たせてやり、お杉には良い袋を持たせてやって、お杉はお玉をかばってやって、袋をとつかえて持たせてやって、姉をかばったわけだ。

そして、あるとき、何だか親が変であるので、お杉とお玉の部屋は別なのだが、ところが、お玉の天井さ大きな石をつるしておいて、殺す分別したらしいんだな。ところが妹のお杉が聞いてて、大変だからというので、お玉の床へ猫を寝かせておいたんだって。姉を自分の部屋へ連れて行って、妹の部屋で寝た。

夜中にドスンと石を落としたら、姉のお玉ではなくて猫

であったんだって。ところが、それから家にいてもたいへんだというわけで、妹が姉をかばって、アイヌ山き二人で逃げてつたらしいんだな。そして、母親も父親も子が二人いねえから、

「アイヌ山に、お杉とお玉がいたならば、どうしてこの鐘たたきましよう」

と鐘をたたいたんだって。それをつれてきたんだと。

婿^{むこ}選び

(宮野)

大阪の鴻池の大金持ちにひとり娘がいた。そして、婿さがすのに、度胸のすわった婿でなければだめだからと相談した。立派な娘だし、お金持ちだし、

「おれも行ってえ、われも行ってえ」

と婿がたくさんあったそうさ。そして一人ずつ来てもらって、そして、

「どうか一晩泊まってください」

というわけで泊めて、お座敷さ通して、夜寝たか寝ないかという頃にこんだ、戸が開くんだそうさ。そして次の間の戸の開く音が、またカラカラとするわけだ。入りの座敷にカラカラ音がして、そこで大きな箱を開けたような音がするんだと。

「いったい何の音だろう」

というので聞いていると、そこから何かを出して、ジョキジョキと切る音がするんだと。変な音がすると思つてのぞいてみると、チカチカと何か切る音がする。こんな変な家では、いったいどんなことされるかわかんねえといって、みんな飛び出してしまふのだった。せつかく来て泊まっても、おつかなくて一晩だって朝までいた人は、おそらくいなかったと。

そしてこんだ、そんなはずはないから自分が泊まってみ

ると言った男があつた。そして、その家へ入ってきて、

「私に、一晩泊めてください」

ということになり、そんならばというので、座敷さ泊められた。夜中にまた、箱から手のような足のようなもの出して、ジカジカジカと切り出すというんだな。まさか、自分にかかつては来まいと度胸を決めて、次の朝起きると、

「お早うございます。夕べはありがとうございます」

と言うと、その主人が、

「ああ、これは立派な男だ。こういう度胸のすわった男であれば、自分の家の婿養子にしましょう」

というわけで、娘に見合いをさせたそうだ。そしたらば、なるほど立派なきれいな娘だそうだ。そしてこんだ、実際これはこういうわけで、人の手や足のようなのは、お菓子でこしらえた落雁らくがんだ。自分の家の婿養子になるには度胸がないとだめだから試した。あなたは立派な度胸だから、どうぞ、うちの婿養子になってくださいというわけで、その養子にその人がなった。

すずめと甘酒の話

(地区名不詳)

すずめが木の枝の穴の所へ、米集めてただって。そううちに、雨が降って穴に水が溜まっただって。そこで、そのまわりで、すずめは歌さ歌ってただって。何だと思つて、見たら、甘酒ができてただと。

猫ねこ檀家だんか

(綱沢)

津川の「ニコウ寺」というお寺の話ですがね。これは猫をかわいがって何よりも大事にしていた人がいたんだな。ところが猫ばかりかわいがっていて貧乏になって、どうにもしようがなくなった。とうとう、猫にごはんあげることまでできなくなって、寝る頃、

「おまえにごはんをやるようなくなった」

と言ったとき、その猫が人間の言葉で、

「恩返しすつから。これから何日先に葬式があつから、そのお棺を法でもって巻き上げつから、俺が。そのとき、おまえが来て拜めば、そのお棺を降ろす。他の坊さんが拜んだって、俺は降ろさないから。拜む方法はへトラや降りなぞ」と言えがいいから」

つて言つて、その猫は消えちまつた。

その人が何日かたつて大尽だいじん（金持ち）の家の葬式さ行つたんだと。ところがその大尽のお葬式のときに、一天にわかにかに掻き曇つて、お棺がズーツと空の上が上がつちまつたんだ。さあ、大騒ぎになつて、坊さんもあつちこつちから呼んで来て、お経あげてもらつたんだが、そのお棺、降りて来ない。空高く舞い上がつて。そんなときに、乞食みたいな姿で、その人がやつて来て、

「トラや降りなぞ、トラや降りなぞ、トラや降りなぞ」

三回言うと、ズーツ、ズーツとそのお棺が降りて来た。

そのおかげでもつて、その大尽の家から、八町ぐらの

土地をもらつて、お寺を建ててもらつて、そこのお寺の住職になつたんだと。そのお寺が今でもあるわけだ。

首塚・胴塚・足塚

（松尾）

むかし、「綱沢」というところ「松尾」のこの境界の沢で、境界の争いがあつた。あそこの公民館のところに清左衛門という人の屋敷があつて、その人が松尾から行つて、綱沢からも一人行つて、代官様だか何だかと山の境界さ調べに行つたんだ。ここから一里ばかり奥だ。

なにぶんにも綱沢の人は負けらかしたいと（松尾側を）思つていたんだもんで、御上に杖で指して教えた松尾の清左衛門を見て、

「なんだ御無礼な。御上にむ足をもつて案内すつとは」
つて言つたんだ。

それから、境界を決めるのに「鉄火の勝負」といって、
鍬くわを真つ赤に焼いて、それをた手に持ってがつて熱くなければ勝ちと
いう、そういうきたないことをやったんだなあ。

そのとき、御上は松尾の人には、熱く焼けた鍬をもたせ
て、綱沢の人には焼けたような色をつけた鍬をやった。そ
いだから、松尾のものは負けてしまった。

とうとう、その人は殺されてしまって、足と胴と首に切
られつちまって、山ん中さ埋められちまった。山の上の方
から、足・胴・首・ときかさまに埋められたんだ。それで、
足塚・胴塚・首塚といつて、今でも残っているんだ。

そのことがあったもんで、この松尾と綱沢とは、縁組は
しなくなつて、今もしませんよ。

子供の遊び歌

(出ヶ原)

からすからす どこさいぐ

けんねえ寺の寺じいさいぐ

手にもつたなんだ

あわ米こごめ

おらにちつとくんねえか

食れつとひろえ

へつたらひろえ

ひろうとつめたい

つめたけりやあたれ

あたつと あつつ

あつけりや うっちゃがれ

うっちゃがつとのみくう

のみくうとけえわ

かゆいこんだかあけ

かあくといてえわ

いてええだ いたちのくそつけろ

すずめの頭 八つに割って
ちやれこちやあいほい

鳥追いの歌

(牛尾)

山口のがきめら

とりもとりも (いね)

ねんねぼしつっついたり

あわんぼしつっついたり

すずめの頭 八つに割って

ちやれこちやあいほい

牛尾のがきめら

とりもとりも (いね)

ねんねぼしつっついたり

あわんぼしつっついたり

【第三部】水の研究

はじめに

日本文化研究会というサークル内に民話分科会が結成されたのは昭和四十七年。以来、民話分科会は夏季・春季の休暇に東北地方の現地合宿で行われる民話採集訪問を基軸として、活動を続けてきました。

民話採集訪問とは、その土地に古くから伝わる昔話・伝説・世間話などを、直に聞いて来ようとする目的で、分科会員が二、三人の各班に分かれて、それらの話を今なお記憶する老人たちを訪れ、その人たちの話をテープレコーダーに収めて来るものです。そして週一回の日常活動日には、合宿の成果をまとめて文字として残す作業に追われる一方で、それらを活用して考察しようという面までには手が回らなかった、というのが実態でした。この点で民話分科会は、一つの重大な課題をかかえていたのです。

結成して三年有余の歳月を経た今年は、分科会員も当初の倍を数える二十数名に至り、合宿のまとめにもそれ程の時間を費やす必要もなくなりました。さらに時期的にも、各人が従来欠けていた研究面を意識し始め、運営面においても、二十数名という大所帯の一人一人の意見を尊重して分科会をまとめていくには、新しい企画を考察せざるを得なくなったのです。

ここに私たちは、従来の課題を見出しました。そこで相談の結果、基底に一つの大きなテーマを定め、かつ各人の関心が比較的近いもの同士の小グループを設けて、テーマに沿った小グループによる各ジャンルからの接近方法を発案したのです。

選んだテーマは『水』。設定された小グループは四つ。そして今日まで水に関する話を、四つのグループが独自の方法と着眼により考察してきました。以下に記載してあるのが、各グループの経過ですが、これはあくまでも途中報告であり、結論ではないことを明記しておきます。(若林)

『水と女』

水にまつわる民話で、その話の主人公が女性である場合が多数ある。沼、川、池などで入水自殺する娘、人柱になる女性、機織姫などと例をあげても限りがないほどである。

私たちはこのような民話の中で、

「入水自殺するものが女性である場合が多いのは、なぜだろう」

という疑問をいただき、これについてみんなで考えてみようと思った。

まず、私たちは、『沼、川、池などに主ぬしがいて、女性が引き込まれる場合』を（A）、『主がいなくて女性が入水した場合』を（B）と分類した。

（A）の中で現れる主を、私たちは男の水神（B）で、入水後女性が何かに化身して現れた場合、それは女の水神だと推測した。（A）のパターンの話は、次のような背景が考えられるだろう。

昔、女性は常に男性に服従の状況にあり、結婚も選ばれた立場でしかなかった。自分の意思はほとんど入る余地はない。したがって、権力の持ち主に対しては抵抗できなかった。強い権力者の見初めた女性は、本人の意思がどうであらうと、その人のもとに嫁がねばならない。この権力者の象徴が『水の神』となつて話の中に出現したと考えられる。それは水が洪水を起こし、多くの犠牲者を出すような荒々しい性質を持っているというイメージからも想像できよう。

昔、日本人にとって絶対的権力者は自然神であつたと思われる。農耕民族にとって一番気がかりなのは秋の収穫である。これを左右するのは『水』であろう。天候を支配する水、それは人々を畏れさせるのに十分であつたにちがいない。

（B）のパターンの場合、毎日の生活の苦しさや恋愛問題の悩みなどで、実際に入水自殺をした女性もいたであろうが、入水後、彼女たちが何かに化身したとするのは、生

前に何の力も持ち得なかつた彼女たちを哀れんで、実話に即して水神となって永遠に生き続けるという形式を作り出したと考えることができるだろう。

女性の入水する話の発生は、水の持つ清らかさが入水自殺を引き立たせ、彼女たちに自殺の手段として入水を選ばせる原因にもなっていると思われる。そして、水の持つ神秘性や沼、池、湖などの持つ静寂さが彼女たちの女性としての美しさを一段と印象づける役割をうけもっているのではないだろうか。

一方、水の神を女性とする考え方について、農作物の豊穰をもたらす『水』は、女性が子を産み子を増やすイメージと共通する面をもっている。これを水の神は女性であるとする原因の一つに考えてよいだろう。

水は毎日の生活に、また農業に大切なものであり、限らない恵みを人々に与える。これが子を育てる母親の優しさと結びつけられて考えられることは、ごく自然な発想ではないだろうか。

古代、日本人は水の神を形あるものとは考えていなかったと思う。ただ、沼、池、湖とか水そのものを神と考えられていたにちがいないと思う。その水の神は民話という話の世界に住むようになる、その姿をいろいろな形で現すようになり、私たちに語りかけてくる存在となるのである。あるときは荒々しい男神となり、またあるときには優しい女神となって人間界に働きかけてくるのである。

水と女性の入水にまつわって、入水後の女性が機織をする類の話が多いことから、水と織姫がどのように結びついたかを探ってみた。まず、歴史的事実として、水を祭る巫女が各地を巡るとき、機具を持ち歩き、普段は機織をしていたという事から、水の祭りや機織りの音が村に響くときの時間的な一致が挙げられる。(数多くある、機具を持つて通る者の入水は水を祭る巫女の入水の『お話化』ではないかと思われる。)

次に、神への供物としての布が神聖視され、森の奥深い

清らかな泉のそばに忌機殿が建てられ、処女達が機織りをしたということから、糸をさらす泉に、機織りの技に長けた女性を存在させたのは自然である。

また、当時の生活面から見ても、嫁入り道具のひとつである事や、姑の嫁判断の対象となるなど、女性の生活と結びつきが深かったため、女性が入水したら、湖下の彼女のため機具を共に沈めもしただろうし、実際、その類の伝説が存在する。

一方、水から受ける連想として、湖上を吹き抜ける風が造るさざ波の文様は布が織り上げられる様に見えるし、湖下でのカタカタという機音が、湖面にやさしい波形を描くという連想も起こる。水と機織りに関する限り、登場人物も女性なら、ここでいう水の性質も、やさしき、静けさ、機織作業、清らかさ、と女性的であり、荒々しい男性的な面をもたない。つまり、水のこういった一面を象徴して、機織りをする女性の主が生まれたものと思われる。

次に、この類の話に関して、なぜ機織りが、天候に左右

するかという疑問であるが、前期の、連想で機織り作業と水面の風や波を結びつけたことを前提とすれば、機織り作業とは、湖や泉のあたりの微妙な気候変化を意味し、自然に対して鋭い観察眼を持った昔の人がそれを感じとったと解釈できる。
(藤川・竹谷・守屋・雨宮・長谷川)

『水と生活』(民話における洪水の分類)

① 実際に起こった洪水の話について

『やろか水』

岐阜県加茂郡太川田(現美濃加茂市)

愛知県丹羽郡犬山町(現犬山市)

愛知県葉栗郡草井村小渕(現江南市)(木曾川流域)

二〜三〇〇〇年前、日々の雨続きのとき、木曾川の上流で「やろか、やろか」という声がする。村人は誰の声かわか

らないが、「いこさば、いこさば」というと、しばらくすると次第に増水して、ついに大洪水になったという伝説。

『白髪水』

十五〜六世紀ごろから

青森県東津軽郡造道村（現青森市）

岩手県盛岡の北上川

岩手県紫波郡佐比内村（現紫波町）

岩手県東磐井郡松川村（現東山町）

福島県南会津郡檜枝岐村

新潟県古志郡東谷村栃掘（現栃尾市）

愛媛県北宇和郡旭村（現広見町）

大洪水のときに白髪の老人が現れて洪水の予告をしたとか、洪水の中に白髪の老人の姿が見えたという類の伝説。

私たちは、これらの話から次のようなことを考えてみた。

(一) 洪水に予兆があるということについて

(二) 予言の多くが白髪の老人がしていることについて

まず(一)についてであるが、現在のような天災であると同時に人災（たとえば、ゴルフ場建設のための無謀な伐採など）であるという考え方はこれらの話には全く見られない。そこに語られているのは、不可抗力の家屋敷及び生産の基である田畑など、すべて泥水とともに運び去つてしまふものとしての洪水であり、それによつては徹底した破壊、日常生活の転覆があるのみで、創造的な面は見られない。

現代ほど科学の進歩していない時代においては、洪水の防止というより、洪水からいかにしてのがれるかという事の方を人々は考えたのであろう。降り続く雨などの自然現象から、その前ぶれを感じたかもしれないが、大方、時期や場所など、その生起は人知では測り難いものであつたらう。

洪水に感ずる危機感や不安はぬぐいされないものであつたため、人々は、何らかの形で予兆を求めたのではないか。

また、音において、ある現象の科学的分析などは不可能で

あつたらう。

そんなとき、不安をどこに解消するかと考えると、やはり超人間的なもの・・・神のようなもの・・・にその原因を見つけたる他になかったと思われる。

大塚「日本民俗学辞典」に、洪水について次のように書かれている。

『・・・予兆の根底には、広範の神信仰の歴史が認められ、予兆を神の啓示と認める態度が古風だった。・・・どんな現象が未来のどんな事実をツゲ、シラセルかを判断する知識は、経験によつて次第に固定してきたが、事実が起こつてから過去にさかのぼつてその原因を求める形が古く、そうした経験の積み重ねによつて、予兆から事前に結果を予知する知識が類型、定型化し、・・・』とある。

ここで、私たちがとりあげた『やろか水』『白髪水』の話は、前の説明の〈過去にさかのぼつて原因を求める形〉で古い考え方の反映であるとされるものである。

次に(二)について考えてみよう。いずれの話においても白い髪の老人というのは、特別な霊力の持主として現れている。この白髪の老人は、「神々と人間とを媒介し、忍耐強いが、一度怒ると自然現象を左右して人々を苦しめる。」というインドの仙人を連想させる。神と人間との間に位置するもの・・・非凡なもの・・・こそ、凡人の行い得ない予言をするにふさわしいのではないだろうか。

白という色自体、何か神聖なもののシンボルであり、白髪というのは長命につながり、かつては、人間が冥界へ行くときに身につけた色であった。この事について、柳田国男は、謡曲十歌占に注目し、白髪の太夫が行う託宣が重要視されていた証拠だといっている。『女性と民間伝承』

一般にも若白髪は幸運のしるしだと考えられており、少し飛躍するが、凡人とは異なる霊力の証だとも考えられる。大洪水を予言する白髪の老人と太夫とは、おそらく予言をもつて人々に崇拜されることで一致している。

白髪水というのは、洪水という危機に際して、あの世か

ら再生した異人のような力ある存在に託宣をあおいだ風習の存在をものがたる伝説だという。『原初的思考』白のフオークロア)

以上の二点を通して見られるのは、昔の人々の洪水（自然現象）のとらえ方であろう。もちろん、現代においても、洪水は起きてしまえば人力の及ぶところではなく、どうしようもないのであるが、前代においては、さらに、その原因すら、具体的な事柄で説明するすべもない恐ろしいものであった。

水の威力に圧倒された人々は、ここに人間の力以上のものを感じ、それを支配するものを想像した。そして、その予兆を求めることにより、不安を少しでも解消しようとしたのではないだろうか。

② 動物が起こす洪水の話について

洪水を引き起こす動物には、竜、大蛇、竜神、大鯰、牛、ワニ、サメなどがあげられるが、ほとんどの場合、竜また

は大蛇である。この竜、大蛇は水の神の化身と考えられ、洪水が起こるといふことは、水の神の怒りであると考えられていた。つまり、自然の宝を独占しようとするものに対して、暴風雨や洪水をもつて強烈な反撃を加えたのである。

水の神は、富を与えてくれる母親的な性格と、犠牲を強いる荒神的な性格とを持つている。洪水を引き起こすのは、犠牲を要求する荒神的な性格を持った神がなす業であると言えよう。そして民衆は、この神の怒りを恐れ、神に祈りを捧げ、犠牲を捧げることにより、神の怒りを鎮めようと考えたのだろう。

このころ民衆は、自然に対する主体性をあまり持っていなかったのではないかと思われる。時代が進むにつれても、洪水は神の怒りとして考えられていたが、犠牲を払わずに神の怒りを鎮めようとした。これは、保守的な見地から脱し、いささかではあるが進歩したと言えるのではないだろうか。

このことから、いろいろな洪水の話の時代を追って並べ

てみる事ができるのではないだろうかと考えた。しかし、資料不足のため、そこまで研究の段階に及んでいない。

洪水を取り扱った話には、しばしば琵琶法師、あるいは座頭とかいった盲人が登場してくる。彼らは、大蛇の秘密を教えられ、その言をもらして命を失い、一村の災厄を救ったという役割を果たすことが多い。

なにゆえにこの盲人琵琶法師は、蛇体から特別な扱いを受け、英雄的存在として私たちの前に現れたのであろうか。

前述の通り、わが国の民間信仰において、竜蛇は一般に水の神と考えられている。蛇体は、仏教の方では琵琶を持つ女神として現れ、琵琶を弾く者の保護者であった。そして、琵琶法師の読唱する地神経は、その神徳をたたえた詞ことばであるという。故に、琵琶法師が水底の神（蛇）から特別な恩顧を得たというのもうなずける。

今日、盲目の人々が祭り仕えている弁天様は琵琶を弾く美しい女性であり、盲人という不幸な者は、琵琶が我国に渡ってくる以前にも私たちの間にあった。彼らは彼らなり

に生を営み、因縁ある守護神にすぎり、水底の神に仕えていた時代があったかもしれない。

そうすると、昔からよく耳にする『盲人蛇におじず』という諺の起源も考えてみる必要があるのではないだろうか。盲人が蛇を恐れないのは、単に目が見えず何も知らないからだとするのは誤りである。何故なら、彼ら盲人は、蛇に関する珍しい知識を昔から持っていたという事実があるからである。

③ 洪水神話について

洪水神話と伝説や昔話における洪水の話の大きな違いは、後者が破壊をその話のテーマにしているのに対し、前者は創造をテーマにしているということである。両者は全く相反するテーマを持っているといえる。つまり、伝説や昔話においては登場するものはたいはい大蛇とか竜であり、それらは湖や池の主であったり、水の神であったりする。そして何かに対して怒り、洪水を起こすという筋書きである。

洪水によって全ては破壊されてしまうのである(前述参照)。

それに対して、洪水神話は、もちろん洪水が起きて全て破壊されてしまうのであるが、その無になった状態が、創造というテーマを導き出すのに必要な条件となるのである。

そこが、洪水神話の他の洪水の話と比べた場合の大きな違いである。

たとえば、中国の華南のミャオ族の洪水神話では、大洪水が起きて人間はみんな死んでしまうが、生き残った兄妹によって近親相姦が行われ、そこからまた人間が創造されるのである。

洪水神話は、中国の南部から東南アジアにかけて広く分布しているが、その結果、生きのびたものが、原初の夫婦神となり、彼らが人類を創造するという形になっている。

では、どうして洪水というものが、人類を創造する話の中で、でてきたのであろうか。それは、

「神話の世界では、宇宙をつくりだすものとして、一般的には水が考えられている。大むかしからのたびたびの経験

で、原始人は、こう水のひいたあとには、かならずものを生みだすどろの層が下にたまるということを知っていた。

(中略) それらのながいあいだの経験が万物を創造するものとして水を想像させたのであろう」

ということなのである。万物のもとには水であるという考え方によってそこから人類の創造ということを考えた場合、洪水というものがその話の前提として出てくることは当然と言える。

また、もう一つの興味深い点は、人類を想像する際のその形態である。たとえば、八丈島のいタナ婆伝説においては、大津波のときに懐妊中のタナ婆が一人だけ助かり、のちに男子を産み、母子相姦によって島民の祖となるのである。

また、前述のミャオ族の洪水神話のように兄妹が生き残って、二人が結婚し、子どもを産んで人類の祖となる話も多い。

またもう一つ洪水の話ではないが、バビロニアにおける

神話では、万物創造の母をチマツトといい、それは水の神であり、この神はそれ自身でものを作り出す能力をもつと信じられていた。父なしで子をもつ処女神であったと言われている。

外国の洪水神話ばかり取り上げたが、では日本の神話の中には洪水神話のような話があるのだろうか。全く同じパターンの話はないが、部分的に洪水神話と類似している点を見い出すことができる。

たとえば、イザナギの火神殺害の神話では、イザナギは剣を抜いて火神の首を切ったが、そのとき流れた血が神々となり、他方、殺された火神の身体各部分にも神々が生まれた。こういう形態は、洪水神話の中では、原初の夫婦神（兄妹や母子）が子を産み、その子を親（あるいは他の神）が切断すると、その破片からそれぞれ子どもが生まれるというパターンと似ているとおもわれる。

また、「イザナギ、イザナミの神婚神話は洪水神話のうち、前半の洪水発生部が脱落したとみるよりも、もともと洪水

発生という要素を欠き、原初の海洋中の島に天から兄妹が降ってくる《原初洪水型》とみるべきであろう。

しかし、この《原初洪水型》も、普通の洪水神話と密接な関係をもつことは明らかである。」というように神婚神話においても、洪水神話となんらかの関係があるようである。

洪水神話というものを言いかえると、それは、人類の始祖神話ということが出来るだろう。洪水神話について調べることによって、むかしの人々の、人類というものに対する考え方の断片を見たような気がする。

（磯前・猪野・他三名）

〈 参考文献 〉

稲作の神話 大林太良著

図説民俗学全集Ⅰ

『蛇』

私たちは、全体のテーマである「水」と関係の深い「蛇」をとりあげ、神話、伝説、昔話の各々の立場から、何故蛇が神と結びついたかを私達なりに考察してみた。

神話編

ヤマタのオロチは、頭、尾が八つ、そして八谷八峽にわたる長さを有していたという。それを頭に思い浮かべて、あなたは何を想像するだろうか。私たちは、山々谷々から流れ出す川の形容と見るにいかにもふさわしいような気がする。『川＝蛇』といえる。川の曲がりくねって（蛇行というよ

うに）流れる様子は、まさに蛇がくねくねと細長い身体を動かして進行する姿に似ているではないか。実際、ある書物でも、はつきりとヤマタのオロチを、川と見たてている文章を認めることができる。日本の神話をみる場合、そこ

には日本の自然条件が介入しているのに気づく。

また、国家形成の基礎をなした主な生産といえば、古代国家では、なんといっても農業水稲栽培であった。古代社会において、自然は、人間にはとうてい力の及ばない偉大な存在であり、大きな災難をもたらすものであった。それは即、自己の生命の危機に結びつくものであったのだ。それとはうらはらに、自然の恵み、豊穰をもたらす存在でもある。

水稲栽培にとって、水はなくてはならない必須のものであり、川の水を利用したのではないかと予測する。平地を四方八方に流れ、水をひくには便利であったろうと思うからである。川は古代人にとって大事なもの、必須のものであるということ、それを蛇として祭ることに通ずる。

古代人にとって、人間が生命を保ち、個体、種族を維持発展させる事は切実であった。そのために生産がどうしても必要である。人間の大きな生存への欲求が、どうにか災害（川の氾濫、旱害など）を避けたいと願う古代人を、水

神として、蛇を祭り信仰させるのである。

伝説編

「日本伝説名彙」を紐解いていくと、蛇の出てくる話というのは意外に多い。従って、蛇が神聖視されて崇められている伝説を調べたわけだが、これだけでもけっこう多くの話がある。そしてそれらの話は、蛇が『ぬし』としての崇拜をうけている内容のことが多い。私たちは、『蛇』と『ぬし』との結びつきを考慮し、その点から自分なりの理解の上に立って『蛇神聖化』の原因を考察してみた。

最初に、蛇が神性化されている伝説の一つを述べてみるつもりだが、今でもなお御神体として祭られ、人々の信仰厚い三輪山信仰、つまりは三輪山伝説を、ここでは具体例として記述してみる。これは昔話にも見える『蛇婿入り』の類型でもあって、最初に文献に見える『日本書紀』崇人天皇紀の大物主神と倭迹迹日百襲姫やまとととひもそひめの内容に、三輪山伝説の原型を顧ることができる。

それによると、毎夜、一人の男性が姫のもとに通ってくるが、朝になるといつも姿がなく、それを不満に思った姫は、男に「一度あなたの姿が見たい」と願うのである。姫の懇願ぶりに男は納得して、「明朝、お前の櫛はこの中をあけて見よ。それが私の姿だ。ただし条件として、自分の姿を見ても驚いてはいけない」と念をおした。朝になって姫はさつそく櫛はこの中をあけて見ると、中にはきれいな小さな蛇がいたのである。念をおされていたことではあったが、姫は、あまりの意外さに気も動顛どうてんして、大声をあげて騒ぎたててしまったのである。すると蛇は、たちまち輝くばかりの美丈夫の姿に戻って、自分に恥をかかせたと、天空を飛んで御諸山へ三輪山に還ってしまったのである。後に姫は泣き悲しんで、箸で下腹部を突いて死んだとある。その墓が、今でも明日香の山辺の道（三輪山）のそばに残る箸墓はしかだといわれている。

これは明らかに三輪山の神が蛇であるということも明記してあるものである。

同様に、三輪山の神が蛇であるという記述は、雄略天皇の七年（四六三年）の段にも見えるから、この信仰は、かなり古くから行われているものであろう。

では、何故に三輪山の神が蛇となったのであろうか。この故縁を明記してある書物は、見出せなかったので、種々の書物から自分たちなりの考察をしなければならぬが、それは五つの理由に分けられるかとも思う。が、ここでは一つの具体例として、三輪山伝説を取り上げたにすぎないので、その記述は避ける。『ぬし』としての『蛇』の神性化に論述してみたい。

それにはまず初めに『ぬし』というものが、如何にして発生したかについて考えてみなければなるまい。

日本人は周知のとおり、農耕民族である。農耕民族にとって、最も崇めるものは、太陽であり水であり、最も恐れるものは、農作物を一挙に駄目にしてしまう天災であろう。すなわち、農耕民族にとって太陽は万物に恵みをもたらす善神であり、災害をもたらすものは悪神であった。

しかし人々にとっては、何が災害をもたらすのか一向に不明だったに違いなく、そうかといってそのままに放置して置けないのが人間の本性ではなからうか。

そこで人々は悪神の実態を自己の身辺の実世界に求め、それぞれの土地に永く住みついている生物の目立つものがそれに擬せられたのではなからうかと思う。つまりはこれが『ぬし』だと思ふのである。

こう考えれば、『ぬし』が暴風雨や不作や病などを流行させて、土地を荒らして民をこまらす張本人であるのだから、人々は『ぬし』の機嫌をとって、平穏な日々を送ろうとする。人身御供ひとみごくうとか人柱ひとばしらなどはそれによる犠牲のたまものだと思う。『ぬし』の害をもたらす超人力に対する恐れから、その機嫌をとり、祭りの催しをしているうちに、いつか当初の敵たる意義を忘れて『何々神』として善神を崇めると混同化されてしまって、『ぬし』の一つたる『蛇』も神性化されたのではなからうか。

蛇婿入りの話は関敬吾氏によると、立聴型（三輪山伝説型）、水乞型^{みすこい}、蛙報恩型に分けられる。ここではそのうち全体のテーマと直接結びついている水乞型をとりあげてみよう。

水乞型というのは次のような話である。

- ① 三人（または一人）の娘をもつ父親が田が干いているので、水をかけたものに娘をやる約束をする。
- ② 田に水がかかる。
- ③ 父親は娘に相談すると、姉二人は断り末娘が承諾する。
- ④ 蛇が侍または若者になって迎えに来る。
- ⑤ 末娘は針千本、釘、懐剣、銀、胡椒、辛子、水油、瓢箪または木綿をもっていく。
- ⑥ 瓢箪を沈めたら嫁入りすると言って、池に投ずる。
- ⑦ 蛇が沈めようとしている処に針を投ずる。
- ⑧ 蛇は鉄の毒にふれて死に、末娘は助かり家に帰る（あるいは、娘は去る）。

この話を若干推察してみると、第一に、発端に田に水をかけるものとして蛇が登場する。これは蛇を水の神としていたからである。生産の一つである水稻栽培にとって水は最も重要で、それによって豊凶は左右される。そこで、農民は豊穰を願うために蛇を水の神として崇拜したのだろう。

第二に娘が蛇のところへ嫁に行くことである。娘が女性、蛇が男性の役割をとることで、必然的に子どもが生まれるということの意味する。これも一種の生産である。そこで、この女性の生産力と、豊かにみらせるための土壌の豊穰さとを結びつけ考えるならば、やはり、この場面でも、農作物の豊穰を願う気持ちがあるのではないだろうか。

第三に、最後の場面で蛇が殺されることである。蛇を水の神と意識し、豊穰を願っているにもかかわらず、何故神としての蛇は殺されなくてはならないのか。それは、おそらく、昔話においては、蛇を水の神の神観念はあつたにせよ、それほど強くはなく、むしろ人間に危害を加えるという体験を通して、恐ろしさから嫌悪の対象として描き出す

ようになり、蛇に対する信仰的意味はうすれてしまったためであろう。

以上のように、三つの立場から見て、一応の結論を述べたが、まとめると、神話、伝説からは、農耕民族であるという理由から、生産に結びついた信仰というものを推察することができた。昔話においても同じように、生産からの蛇に対する神意識は認められるが、他の二つほどの強さはみられないといえる。これが私たちの見解である。

(廣田・若林・清水・菊地・笹川・他一名)

〈参考文献〉

- ・妖怪学入門 (阿部主計)・民俗学辞典 (柳田国男編)
- ・日本伝説名彙 (柳田国男)・神話伝説辞典
- ・民間信仰 (桜井徳太郎)・大神神社 (中山和敬)
- ・日本神話 (川副武胤)・昔話と笑話 (関敬吾)
- ・大和の伝説 (仲川明)・原初的思考
- ・民話 (第二号) (民話と文学の会)

- ・日本の民俗 (朝日新聞編)
- ・日本伝説傑作選 (和歌森太郎・二反長半)
- ・日本伝説集 (武田清澄)

『主』

昔話伝説の中には水に関係する話が多い。そしてその中で主の登場してくる話も少なくありません。主は本当に存在するのでしょうか。なぜ、主という存在が考え出されたのでしょうか。主とはいったい何だろう。私達のグループでは、そのようなことに対して考えてみることにしました。

例えば主の登場する話には次のようなものがあります。

『小沼の鮭』という話は、小沼の主である鮭が沼に毒を流して魚をとろうとした人間の前に坊主となってあらわれ教えさすすが、それにもかかわらず毒を流してしまった人間

は死んでしまうという話です。

また信州中野の『黒姫伝説』は、小館城主の娘黒姫を大沼池の主の黒龍がみそめ、小姓の姿をして求婚するが、正体を知っている城主は難題をかける。傷つきながらも難題を解決した黒龍だったが、約束を守らない城主に腹をたて、大暴風雨をよんで姫を攫さらい天に昇あったそうです。また主らしからぬ主として、河童伝説やその他妖怪の話も各地に残されています。

第一の話では、多分に村落での教訓的な面が強調されているが、第二の話では、その面は薄れ、主がヒーローとして話を盛り上げています。第三では単に逸話的にその存在が語られています。多くの昔話伝説をみていくと、どうやらこのような三種に分類されていくように思われます。ではこの三種の話は全く別々な発達を遂げてきたのでしょうか。いったい主はどのようなにして発生したのでしょうか。私達は百話程の話をあげ、まずたたり（報酬）とその原因を考えてみることにしました。主の出てくる話には全て、

たたりというものが存在するとは限りません。

たたりとして表れるものには自然現象（暴風雨、洪水、池が枯れる等々）人が死ぬ、病気、変身（蛇体になる）などがあげられました。その原因としては道徳的なもの（川沼を汚す、禁漁を破る）、主を維持するために人々が考え出したと思われるもの（主にみこまれる、姿を見る）、その他主に害をおよぼすものなどがありました。

これらを調べていくうちに、主を考え出す背景として次のものがあると考えました。

第一は環境の神秘性です。木々に囲まれた沼、底なし沼、不気味な岩など、主のいるとされる湖沼河川ではそういった環境があるものが多いということです。

第二には自然現象に対する人々の恐怖心です。例えばひでりとか洪水とか人間の力でどうにもならない、人間を超越した力への畏敬です。この二つが結びつき、主という具体的行動の主体が生まれたのです。この二つを結びつけた要因としては、異論もありましたが、一応道徳というもの

が考え出されました。

つまり水源を荒らしてはいけないとか、魚をむやみに採らせない、子供を水の危険から救うためなどであり、これら村落共同体を守る掟のようなものは、主の存在を強化する作用因としても働いたと考えられます。そして主の存在が考えられると、大洪水や風雨や疫病などと結びつき互いに作用しあって、さらに主という具体性を持った動物的なものが考えられるようになります。

小沼の鮭では教訓的な面がそのまま発展して作られた話であり、黒姫伝説では教訓面を離れ、メルヘン的に主が住みついている湖沼を離れ、それ自体が中心となって活躍するようになった話であると考えられます。

一方河童や妖怪は自然現象への恐怖とは結びつかずに、環境への神秘性が発達して生まれた主であると考えられます。こうして私達は主の出てくる話をその発生から三型に分類することを考えています。

しかし、全ての話がこの型どおりという訳ではないし、

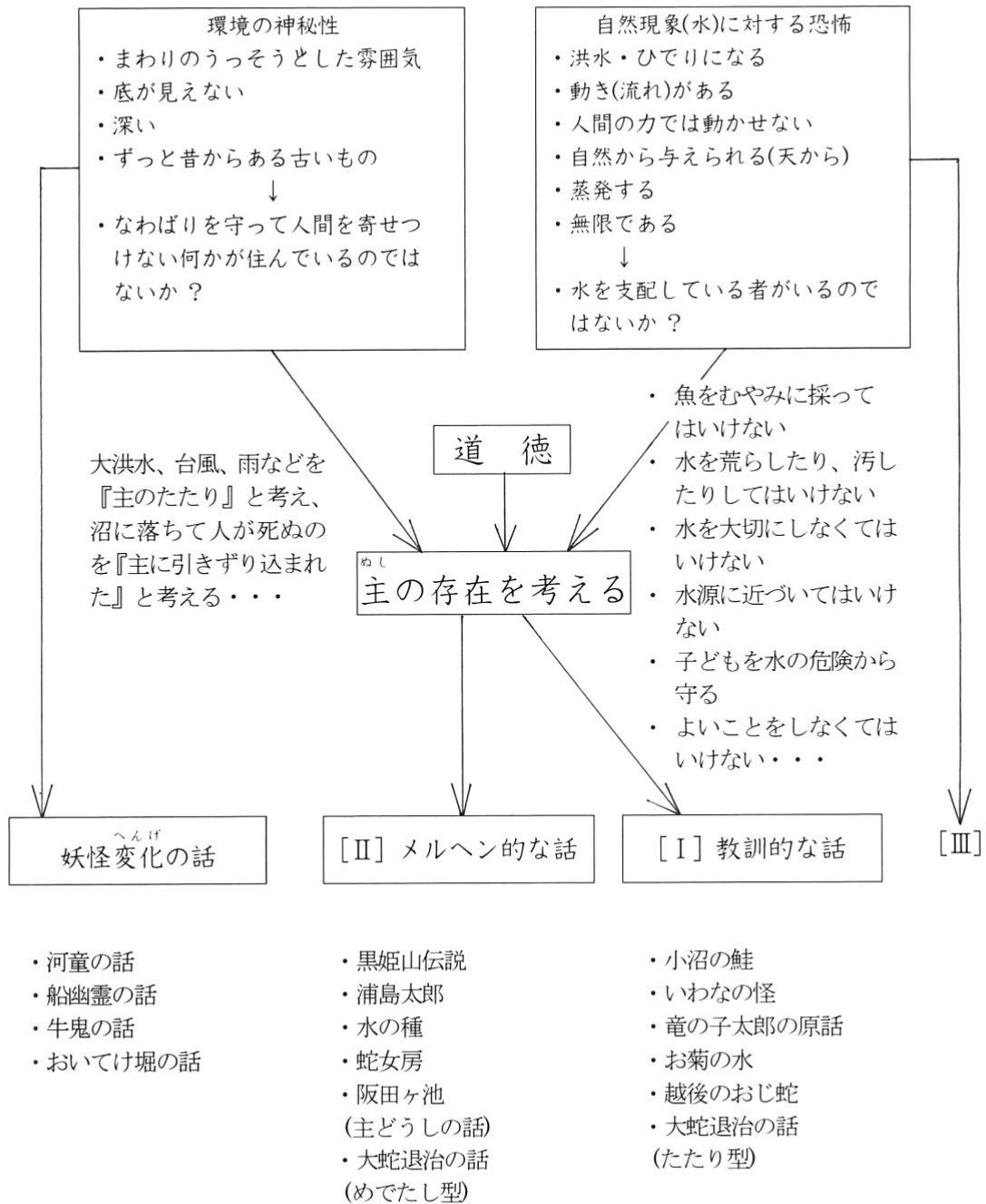
何によって神秘と自然現象への恐怖心が結びついたかは、まだ明らかではありません。他の方々の批判を請い、また今後の研究を期待して、今はこの段階で発表するしだいがあります。

(小栗・滝川・深野・津田・郡司・他二名)

(次ページ掲載)

『たたりの原因からみた主の発生と話の分類』

たたりの原因からみた^{ぬし}主の発生と話の分類



高畠町・西会津町の民話（話者と題名）

〈題名の下の数字は、掲載したページを表します。カ

ッコ内は、採話当時の話者の住居地区名です。〉

【高畠町の民話】		
☆ 黒田梅野（船橋）		
いわしの頭も信心から	・	七
弥三郎ばんば	・	二五
☆ 齊藤博七（亀岡）		
麦つき地藏	・	八
佐平話	・	九
☆ 菅野利享（泉岡）		
南の山の馬鹿むこ	・	八
☆ 菅野貞雄（泉岡）		
佐兵ばなし	・	一〇
☆ 鈴木よしゑ（中島）		
食べたししょうでん様	・	一一

☆ 菅野キウ（熊野）		
はん子	・	一二
☆ 高橋うめよ（相森）		
シンドウ呉服屋の話	・	一三
☆ 二平たけ（北和田）		
化け物の話	・	一四
☆ 鏡 宮勢（川原子）		
さどりのわっぱ	・	一五
力持ちになった住職の話	・	一五
おりや峠の大蛇	・	一九
三匹の老狐	・	二二
☆ 大木喜代松（清水）		
高安の犬の宮の話	・	一七
☆ 高橋うめよ（相森）		
大和屋の伝説	・	二七
☆ 土屋弥太郎（高安）		
鈴沼の話	・	二八

☆ 安部よしゑ (北和田)		
子育て地蔵の話	・	二九
☆ 話者名不明 (地区名不明)		
相撲の話	・	一九
☆ 話者名不明 (佐沢)		
船坂しんべいの話	・	二六
【西会津町の民話】		
☆ 三留 保 (青坂)		
ばかむこの話	・	三一
ますびきと猿	・	三三
☆ 伊藤あや子 (出ヶ原)		
ホトトギスの兄弟	・	三五
子供の遊び歌	・	四七
☆ 平河義道 (真ヶ沢)		
狐に化かされた話	・	三五
☆ 小椋 茂 (弥平四郎)		
お釈迦様の話	・	三七
鬼んばの話	・	三九
☆ 長谷川伊佐海 (綱沢)		
猫壇家	・	四五
☆ 五十嵐寅八 (松尾)		
首塚・胴塚・足塚	・	四六
☆ 沼沢シマ (牛尾)		
鳥追いの歌	・	四八
☆ 話者名不明 (宮野)		
継子いじめ	・	四三
婿選び	・	四四
☆ 話者名不明 (地区名不明)		
すずめと甘酒の話	・	四五

あとがき 「本当の教養人」

郡司秀明

私はよく友人から民話に対する批判を受ける。

「当然滅びゆくものをなぜ無理じいして掘り起こそうとするんだ。そんなことをやってお前に何の足しがあるんだ。語りに興味があるのなら、現代の語りに目を向けたらどうか。村という最小単位の中での語り、それも半分風化しかかったものを取り上げるよりも、もっとお前が、そして、俺達が生活しているこのマスメディアのなかでも生きられる、いや芽生え始めているかな、まあそんなことはどうでもいい。とにかくそんな語りがある筈なんだな。それを大切に育ませてやるのがお前らの本当の役目じゃないのか」

私はその度に絶句する。民話というものに興味を感じたときからずっと絶句し続けているのだ。もし民話に心があるならば、もし民話に命があるならば、民話は村を追い出されたのでもなく、自分でどこかへ逃げたのでもなく、き

つと自殺したに違いない。民話は真実に飢えているのである。はたして現代に民話は生きているのだろうか。新聞はウソを伝え、テレビではデマをいい、大学は我々が本当に知りたいことを教えてくれない。

教養人と呼ばれる人達は、虚辞に満ちた話が大好きである。そんな人の心には民話は住めないのである。民話は、都会人を含む現代人に見切りをつけたのではないか。民話にも意思があるのである。

新聞の論説委員が問題をありのままに伝えてくれるとは限らない。海の汚染問題を漁師のおじさんの方が正しく伝えられるかもしれない。民話が住める世界とはマスコミが話者として存在するのではなく、私達一人一人が語り手として真実を伝えていける社会なのだ。

西会津でベコ先生なる人物にお会いした。先生はそのことをよく理解しておられるかただった。現代社会にも本当の教養人がいることをお知らせしてこの冊子のあとがきとしたい。

民話分科会名簿（学年は一九七五年度）

郡司秀明	一年	工学部
笹川香寿江	一年	教育学部
松倉 薫	一年	教育学部
雨宮さとみ	二年	教育学部
竹谷寿々代	二年	教育学部
津田奈都子	二年	教育学部
長谷川博子	二年	教育学部
深野弘美	二年	教育学部（分科会チーフ）
守屋晴子	二年	教育学部
猪野明江	三年	教育学部
小栗幸宣	三年	工学部
菊地美恵子	三年	教育学部
清水公子	三年	教育学部
滝川陽子	三年	教育学部

藤川 誠	三年	工学部
若林己千雄	三年	人文学部
磯前礼子	四年	教育学部
廣田真理子	四年	教育学部
ほか	五名	

《編集後記》

昨年までの『南郷むかし』・『ざっとむかし』とは、ひと味もふた味も違って皆様の前にお目見え致しました『とんとむかし』、いかがでしたか？

今年の編集委員は美しく(?)全員女性で統一しました。表紙も赤で色っぽくせまりました。民話分科会女性軍の品の良さが感じられる美しい冊子だと自画自賛しています。

今、外は雨、私のお腹は一杯です。(R)

『とんとむかし』第四集(水の研究)

(発行者) 千葉大学日本文化研究会 民話分科会

(発行責任者) 深野弘美

(編集責任者) 磯前礼子

(発行日) 一九七五年(昭和五〇年)十一月一日

リポジトリ公開用覆刻版

『とんとむかし』第四集(水の研究)

山形県東置賜郡高島町の民話

福島県耶麻郡西会津町の民話

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧)日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】二〇一九年九月一日

<https://doi.org/10.20776/106354>